實業教育國語讀本 新村出編 巻二

375.9
Shi14
資料室

42518
教科書文庫
4
815
44-1920
20000
47789

375.9
Shi14

文學博士新村出編

實業教育

國語讀本

株式會社東京開成館

室料資

廣島大學圖書之印

卷二 目次

一 克己 幸田露伴 一
二 九升田の恢復 その一 六
三 同 その二 三
四 渡り鳥 薄田泣菫 一七
五 京城より 德富蘇峯 二五
六 青島入城式 その一 澁川玄耳 二六
七 同 その二 同 三三
八 天橋の月夜 德富健次郎 三九
九 わが子を奉公先の主人に

廣島大學教 47789 圖書

依賴す（書翰文講話）　四六
一〇　贈物（高等小學讀本）　五〇
一一　兎狩　德富健次郎　五五
一二　北海の紅葉　角田浩々　六一
一三　歳暮　中邨秋香　六六
一四　私の母　夏目漱石　六八
一五　中江藤樹　橘南谿　七三
一六　雪合戰　大町桂月　八〇
一七　賢所　八三
一八　紀元節　八八
一九　貯金の義務　村岡恒利　九二

二〇　カーネギー　九八
二一　カーネギーの教訓（近世泰西英傑傳）　一〇五
二二　老僧の接木　室鳩巣　一一〇
二三　伊能忠敬の晩學　その一　幸田露伴　一一三
二四　同　その二　同　一一七
二五　堅志力行　安田善次郎　一二一
二六　地震の前兆　細川潤次郎　一二六
二七　震害地より（一日一信）　一二九
二八　勇士の行くて　幸田露伴　一三三
二九　肉彈　一三四
三〇　膽大心小　大町桂月　一三九

三一　越後屋の創業　熊田葦城　一四三
三二　眞の成功　一四九
三三　生きるために食へ　加藤弘之　一五二

廣島大學圖書之印

實業教育

國語讀本　卷二

文學博士　新村出　編

一　克己

幸田露伴

如何なる事業にもせよ、稍大いなる事業は、その事業に當る人、よく自己の私慾、私情に打克ちて、始めて之を成就することを得るものなり。克己の工夫なくして、大いなる事業を成就したる例は、甚だ少し。又如何なる人の事蹟を見ても、その人にして稍大いなる人

ならば、その人は必ず克己の工夫に富みたる人なり。卽ち克己の工夫を爲さずして、大いなる人となり得し人は、殆ど無しといふも可なり。蓋し自己に克つ能はざるほどの微力の人、いかでか能く萬人に勝るゝことを得ん。これ自然の數といふべきのみ。

また人若し自己に克つことを能くしたりとせば、その人は卽ち成功の段階に一歩を上したる人といふべきなり。蓋し自己に克つの極めて難事たるは、勿論なれど、一度自己に克ち得たる時は、その克つことの難きだけ、その克ち得たることの愉快の大なるを感

ずるものなり。人一度この克己の愉快を感じて、その味を知る時は、常人が見て以て非常の困苦なりとなす事をも、悦んで處辨し、常人が見て以てその勞苦堪へ難しとなす事をも、樂しんで爲すことを得べし。

例へば一日十里の路を行くは、常人の能くする所なり。十一里の路を行くことは、その差僅に一里にして、その一里を朝稍早く出でて歩まんには、歩み得べきなれども、曉の眠の心地好きまゝ、夙く起き出で難きは、常人の情なり。今この情に打克ちて、十一里歩みたりとすれば、他の人々は既に我が一里の後にあるな

り。我が情に克ちたる當時の凜然と緊張せし氣分、また今衆人に先んじて、一里進み得たる眼前の結果、いづれか愉快ならざらん。この愉快を味はひ得たる時は、その人は翌日の同じ場合に、自己に克つことの、昨日に比して甚だ容易なるを感ずべく、隨つてまた常人に比して一里多く歩むことを、敢へてするに至るべし。是の如くなれば、次の日の夕には、その人常人に先だつこと二里となるべし。右の如き場合を重ねんには、常人とその人との距離非常に遠くなりて、遂に常人の如何にすとも及ぶべからざるに至るならん。」

こゝに說きたる例は、やがて常人と卓絕したる人との距離の生ずる所以なり。元來天稟の資質の厚薄によりて、人の勢力に差あることは、爭ひ難き事實なれども、先天の差によりて、凡人と非凡の人との距離の生ずるよりは、各人の心掛の差によりて、甲者と乙者との間の距離の生ずること、實際の世間に甚だ多きを見る。卽ち克己の工夫を用ゐて事に勤むる人と、己れに克つの工夫を毫末も敢へてせざる人との差は、日に日に漸く增大して、終には一方の人は非凡となり、一方の人は平凡に終るに至るなり。

九升田
秋田縣羽後國
仙北郡强首村
大字九升田。

二　九升田の恢復その一

九升田は山間の一村落で、人家は四十に滿たず、住民の數もおよそ二百五十に過ぎなかつたが、もと村民は擧つて勤儉を旨とし、人情は美しく、殊に九升田米といふ良質の米が産するので、家給し、人足り、洋々の氣象が村内に滿ちて、久しく郡内での富有の村として、縣下に知られてゐた。

さるに、明治二十年の頃、舊幕時代から入會官山として所有してゐた山林に關して、爭が起り、それが打續

いたために、人情は險惡となり、負債は山の如くに積り、遂に耕地は他村に抵當に取られるやうになつた。

石川理紀之助

これを見かねた地方の當局者は、屢恢復を企てたが、功が無かつたので、時の郡長は遂に石川理紀之助翁を起して、この難治の村を救はうと思ひ、慇懃に翁に相談をかけた。

そこで石川翁はまづ九升田を視察し、救ふことが出來ると見込んで、恢復の計畫を立てた。それは一年を一期として、三年間に完成しようといふので、第一期は勤勞の習慣の養成を主とし、兼ねて節儉を奬め、風俗を改良し、第二期は風俗の改良を主とし、兼ねて節儉を奬め、勤勞を習はせ、第三期は以上の三項を平等に厲行するといふ方針であつた。翁はまづ範を示すために、その事務所建築の費用を縣當路者の見積の十分の一、卽ち十圓で建てようとし、古小屋を借りて、屋根を藁葺とし、庇の屋根を笹葺とし、疊の破れ目に

は學校兒童の手習反古を貼り付けるといふ風にした。

かうして九升田に住み込んで、或日村内の人々を集めて、極めて眞面目に且おごそかに言渡した。

「かねて知事さんや、郡長さんから、この村の恢復に就いて、私に相談があり、且皆さんも私を便りとして、この村を興さうといふ覺悟であり、私もまた引受けて盡力しようと決心したからには、諸共に一所懸命にならなければ、迚もだめである。そこで、まづ皆さんが本氣であるか何うかを見る試驗がい

る。皆さんは明日から三十日の間、午前三時に寢床を離れて、二時間ほど繩仕事をしなさい。」

村民は、翁の命令には一切服從するといふ誓を立てゐたので、いづれも納得して別れた。

翌日、翁は例の如く早く起き出て、かち〳〵と相圖の板を打つて、三時を知らせると、山寺では鐘を撞いて之に應じる。山深く、谷幽かな九升田の未明は、板の響、鐘の音に寂寞を破られて、反響は山から山へ傳り、此處の家、彼處の家、いづれも皆目を覺して、繩仕事に取りかゝるといふ有樣。

最初の一週間は、とかく試驗に落第するものもあつたが、その後は、いづれも時刻を違へず早起して、仕事にかゝつたから、三十日の後には、繩仕事で四十圓ばかりの收入があつた。翁は村民に語り聞かせた。

「何うだ。早起をするので、夜酒を飲むこともやめになり、一方には二時間の働で、四十圓の仕事が出來たではないか。」

村民は翁のこの簡易な、しかも實踐的な教訓につくづくと感じて、ます〳〵眞面目な考を起すやうになつた。

三　九升田の恢復その二

早起の外に、尙三十日間の試驗科目に加へられたものがある。卽ち宅地の內外の掃除、馬鈴薯の植付、裏畑の耕作、肥料の製造、稻架用材の保存等で、いづれも勤勞の習慣を養ふ方法である。

翁がこの村に來るまでは、村內は實に不潔千萬で、家家は掃除が行屆かず、そのまはりは草の生ひ茂るに任せ、亂雜なこと言語道斷であつた。翁はこれは全く農家の怠慢の證據であると思つて、掃除の厲行をすめると、村民の中には、不精の本音を吐いて、

「掃除をしてゐては、手間が取れて、仕事が出來ぬ。」

と、囁き合ふものがあつた。翁は聞きとがめて、

「手間が懸るといつて、飯が食へぬといふ譯はあるまい。心掛さへあれば、掃除ぐらゐはなんでもない手間ぢや。そんなに手間が惜しければ、俺が助けて遣る。」

と言つて、忙しい中から、鍬と箒とを持つて來て、その家の周圍を掃除して遣る。前に愚痴をこぼした不精者も流石に恥入つて、爾來掃除を勵み、村內到る處に、

すが〳〵とした氣分がたゞよふやうになつた。

翁は「寢てゐて人を起すな。古いものを捨てるな。廢物を利用せい。事物の恩を忘れるな。」といふことを教へてゐた。また、一青年が翁の言行に感じて、

「九升田は今日非常に困つて居りますから、私は九升田のために十分に骨を折らうと思ひます。」

と述べると、翁は、

「同じ九升田のために盡くすにしても、九升田の恩に酬いる覺悟で、働くのが肝要ぢや。九升田を善くしようとするには、部落のためにすると思はず、先

祖代々から九升田で受けた恩を返すと思つて、働くがよい。」

と、諭し聞かせたことがある。翁の用意はこの話の中にも現れて居る。

刈和野
秋田縣羽後國仙北郡刈和野町にあり。

翁は刈和野といふ驛へ往復するのに、數里の距離を人力車に乘つたことはなく、老軀に自ら荷物を擔いで、徒歩するといふ有樣であつた。村民は之を見て、

「金持長者の石川先生があの通りだから、我々のやうな貧乏人は、決して贅澤は出來ない。」

といふやうになつて、ます〳〵翁に心服した。

かうして、翁の計畫は着々と功を奏した。村民は自暴酒を飲む習慣を容易に改めなかつたが、翁が晩食後、村内を巡視するのに憚つて、遂に夜は大抵八時から九時までの間に寢るといふ風になつた。從前のやうに村民がむやみと夜ふかしをして居ると、決してろくな事はしない。「罪惡は夜の子なり。」といふが如く、修養のないものの常として、酒も飲み、賭博も打つのであるが、夜早く寢て、朝早く起きるから、その弊害はなくなつて、一方には風紀が改り、一方には産業が發達して來た。

九升田復興の終了式を擧げたるは大正四年八月にて、石川翁はこの時七十二歳なりしが、歸村後病を得て、翌九月逝去せり。

かうして、この難治の村は計畫通りに次第に恢復して、三年後に復興の終了式を擧げ、翁は村民に別れを告げた。村民は尠からずこれを惜しんだ。

翁が九升田恢復のために山ずまひをして居る中に、その經營狀態を視察する目的で、九升田を訪うたものが、一个年に千人にも上つたといふ。（稼穡傳による）

四　渡り鳥

薄田泣菫

私達が七つ八つの頃には、そろ〳〵秋が更けて來ると、晴れきつた空を毎日のやうに雁が渡つた。私達は

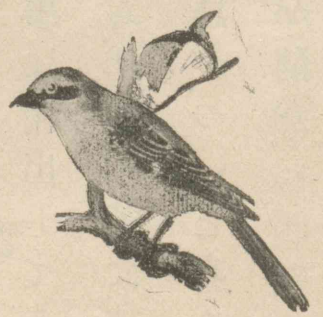
それを見かけると、吹きさらしの野路に立つて、空の一方を振仰ぎながら、

「雁よ。棹になれ。

棹になつたら、鍵になれ。」

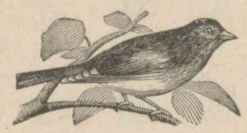
と、その長い行列が次第に雲の中ににじみ込んでしまふまで、聲をからして叫んだものだ。たかし、いつの間にか雁も少くなつて、今では、晝間その長い列が空を渡るやうな事は、よく〳〵人氣の遠い野原か何かでないと、滅多に見られなくなつた。

渡り鳥の初客といつたら、―さやうさ、まづ鵙とでもいつて置かう。―秋の彼岸が過ぎて、そろ〳〵日影が黄色がかつて來ようといふ頃、私達はどうかすると、暖い日の午過ぎ、そこらの木立で、甲の高い、鋭い聲を聞く事がある。あゝもう秋だなと、思はず振りかへつて見ると、矮小な櫟に交つて、づぬけて脊のひよろ高い楡の木に、鵙が一羽止つて、黄色な夕日を受けて、羽莖が金のやうにきら〳〵してゐるのが見える。私達はその瞬間、言はうやうのない強い、すこやかな氣持が、胸に流れるのを覺える。



鵙

鵙の次には鶸が來る。山家の晝すぎ、懶さうな蟋蟀の聲もいつの間にか鳴き止んで、枯葉ひとつ寢返りを打つ音までが、はつきりと耳に入る靜けさの底に、どこからともなく、幽な聲が洩れて來て、何の音とも分らない。すると、木蔭の韮畠か何處かで、餘念もなく、せつせと仕事に精出してゐた農夫が、ひよいと顔をあげる拍子に、すぐ鼻先の小枝から、枯葉のやうな小鳥が、ついと身をそらして、逃げて往つてしまふ。それが鶸だ。



黄鶸

鶸といつたら、まるで悲哀でも抱いてゐる人のやう

に、大抵は連にはぐれて、唯一羽で來る。そして、そこらの小枝にとまるなり、ひよくり〳〵と輕い御辭儀をして、さゝやくやうな聲で唄ひ出す。

鶸が來て、ものの十日もたゝぬうちに、また四十雀が來る。この鳥は鶸と違つて、十羽も二十羽も群を組んで來る。山から里へ移る時などには、まるで時雨でもするやうに、細かい羽音がさつと空を掠めて聞える。そしてそこらの木立におろすなり、眩しい程すばしこく蟭蛸（おほちがさぎ）などを啄きまはしながら、鼠色の背をそらし、柔かみ

四十雀

のある胸の圓みを見せて、銀の鈴を振るやうな透徹つた聲で、早口にしやべりつゞける。」

小雪がちらつく頃になると、鶺鴒が來る。これは鶺と同じやうに大抵獨法師で、それもこつそりとあたりを忍ぶやうにして來る。初冬の午すぎ、山近い田舍の小家で、爺は炬燵に靠れかゝつて、こくり〳〵と轉寐をする。その側で、婆さんはせつせと絲車を繰つてゐる。煤けた障子に、檐に吊るした干菜の影が見すぼらしく映つて、時をりちつぽけな小鳥の影がちらついたりする。

鶺鴒

どうかして絲目が切れて、眠さうな紡錘の音がぱつたり止むと、こそ〳〵と掛菜をむしる音がするが、老人の耳にはそんな音の聽取れやうが無い。婆さんはうつむいた儘、また絲を紡ぎにかゝる。さうかうする間に、鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、ひよいひよいと小きざみに籬を傳つて、隣から隣へと、狹苦しい物陰を出たりはひつたりして、移つて行くのだ。

鶺鴒とあとさきになつて、頰白が來る。冷い雨のびしよびしよと降るなかを、獨者の頰白が灰色の胸までびしよぬれになつて、しよんぼりとそこらの木に止

つてゐるのを見ると、私の國では、この鳥の鳴聲を解いて、

「一筆啓上つかまつる。
子供泣かすな。火の用心。
今度の便に金十兩、
やりたいけれど、一文も御座なく候。」

と、言傳へられてゐるのを思ひ出す。

後の雜木林にこんな小鳥が來る頃になると、野らにはもうそろ〳〵鶉が來、

鷸

鶉

山陽　神戸より下關に至る鐵道山陽線をいふ。
京釜　釜山より京城に至る鐵道京釜線をいふ。
大田　釜山より京城に至る間の一驛。釜山の西北百七十哩にあり。
愛吾廬　作者の家の號なり。

五　京城より

徳富蘇峯

山陽一路、夏橙青く、稻粱黄なり。朝鮮海峽を渡れば、京釜道中、朝鮮人の白衣と其の屋上に乾かしつゝある赤き唐辛と相映じて、自ら一種の趣あり。釜山を出づれば、碧天寸翳なし。而して大田に至れば、急雨箭の如く、車窓を撲つ。更に京城に著すれば、月光霜よりも清し。四箇月有半ぶりに西大門外の愛吾廬に入る。周圍の人も物も悉く舊知ならざるはなし。卓を圍みて相與に歡笑し、更の深け行くを忘る。客を送りて、出でて

窓外を眺むれば、滿庭のコスモス今を盛りと咲き亂る。亦是一段の情味あり。

六　青島入城式その一

澁川玄耳

黄海に南面して、青島政廳が巍然として聳えてゐる。一條の大道は廳の階から直ちに海岸に達し、其の正面に小い島がある。元來此の島が青島といふ名の持主で、此の島ゆゑに此の灣が青島灣と呼ばれてゐたのであつた。併し今は陸の方が青島となつて、小島の名はアルコナと變つて了つた。

神尾將軍
名は光臣、陸軍中將、青島攻圍軍司令官

山梨參謀長
名は半造、陸軍少將、青島攻圍軍參謀長

若見將軍
名は虎治、陸軍少將。

馬場先門外
宮城正門の通りに當る。

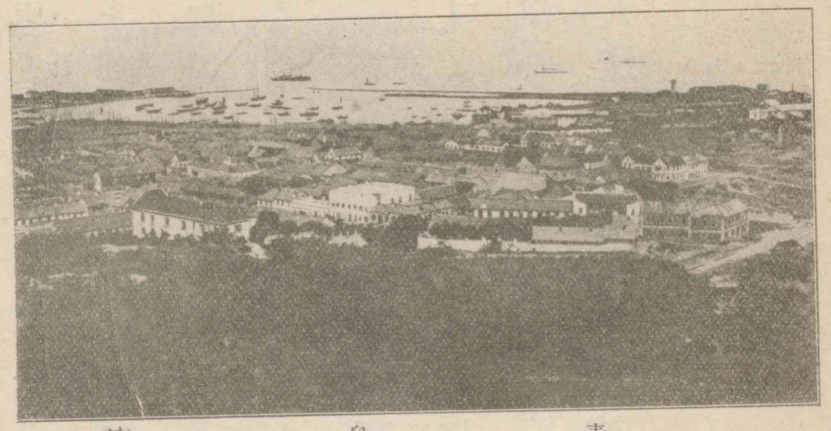
政廳の屋頂には今、日章旗が飜つてゐる。黄海を、否アルコナ島を背にし、此の日章旗と相對して、神尾將軍は馬を立ててゐる。山梨參謀長以下幕僚は其の左翼に馬首を駢べ、右翼に少し離れて侍從武官若見將軍が手綱を控へ、其の右に文官、次に從軍記者及び僧侶が整列してゐる。此の前を東西に走る大路をプリンツ＝ハインリヒ街といふ。此の地點こそ眞に青島の心臟ともいはれる樞區で、東京ならば、馬場先門外と日本橋通とを兼ねたやうな所である。

時は大正三年十一月十六日午前十時で、獨逸皇帝が

好口實を見出して、此の青島を强奪してから十八年目の、而も同じ月である。當時獨逸艦隊司令長官は今しも吾等が整列してゐる此の海岸に上陸して、三時間以内に退去せよと、支那の守備隊長に要求し、一兵に衂らずして占領を遂げ、やがて山東省、支那、東洋に於ける優越な勢力の根據を作つたのである。此の獨逸帝國の誇としてゐる、極めてめでたい土地で、神尾將軍は攻圍軍の分列式を行はうとするのである。三々五々、殘留の獨逸人達は路傍に佇んで、日本軍の分列式を觀ようと待つてゐる。戰爭開始以來、青島の

男といふ男は、殆どすべて兵器を執つて守備に加り、そして概ね今は俘虜となつて了つた筈で、現在青島に殘つてゐる獨逸人は、婦人と小兒とが多いのである。今日の見物に、無心な小兒が嬉々として笑つてゐる。待ちあぐんでは騷ぎまはつてゐる。此の幾月、恐ろしく寂しかつた街に、俄に多くの人が入つて來るのだから、子供達には嬉しいことに違ない。母や姉や老人達には、聲をひそめて叱つてゐるのもある。或は賤しい商人などであらう、くはへ煙管で、餘所事の樣にぶら〳〵歩く奴もある。窓の内、屋根の上などから眺

ポンペイ
昔火山の噴火にあひて灰に埋められ、久しく地底にありし町。今のイタリヤにあり。



青島市

めてゐる者もある。獨逸人の中には支那人も雜つてゐるが、此の廣い街、繁華の中心である大通りに、見渡したところ、見物人がすべて百人とは無い。兩側の大厦高樓、皆戸が鎖されてある。予はポンペイの町、一地の底から掘出された死の町に立つてゐるやうな氣もした。併しそれは予が獨逸勢力の消

全景、街

長といふ樣な事を考へるからであらう。目の當り見える青島は、むしろ陽氣に裝飾されてある。屋根は概ね赤がちな瓦に掩はれ、壁は黃色、柿色、白色が多い。蔦、葛が裝飾的に塀にも這はせてある。それが今丁度朱を濺いだやうである。十八年來の努力空しからず、山々には松も稍長じて、山骨を隱すまでになつた。

其の他、落葉松、栗、櫟、橡（ナラ）、櫓（トフ）、公孫樹、アカシヤ、楓の類も皆能く育つてゐる。此の頃の砲火の中にも既に幾度か霜が降つたのであらう、遠く近く淺く濃く彩られてゐる。利口な獨逸人は、祖國の爲に死ぬのを惜しんで、命大事と脆くも降伏して了つたが、山も野も街も血を塗つたやうな青島の初冬は、紅葉の勝區として、日本にも得易からぬ眺である。況や青島半島は對岸の海西半島と相對し、幾つかの島嶼が其の間に散らばつて、山の姿は尋常でなく、汀の沙も清らかで、風光の明媚なのは、他に類を求め難い。一言に評し去ると、青島は別莊地の光景である。商港とか首府とかいふ趣は甚だ乏しい。

七　青島入城式その二

遠く喇叭の音が起つた。待ち構へた人々の氣が一時に引締る。軍馬も皆勇むのであらう、神尾將軍以下手綱を控へる。山梨參謀長の馬が頻に尾を振る。其の隣の某參謀の爪白の馬が、小招するやうに前脚を搖かす。

朝から曇つて、一時は少し降つた空が、がらりと霽れ

旅順開城式
三十八年月日

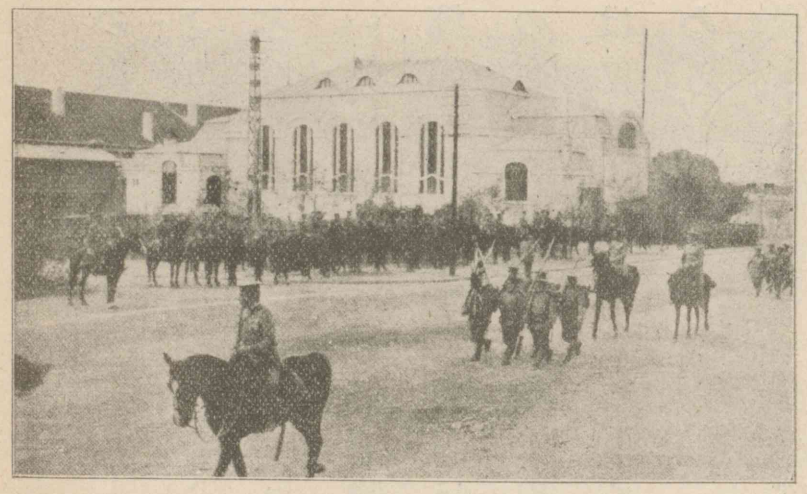
て、市街が麗に照り輝く。喇叭が次第に近くなる。蹄の音が戛々と響く。其の時先頭の一將校がかけた凜とした號令が、今まで引締つてゐた寂寞を破る。折からプロペラーの音高く、頭上の空に飛行機が翔つて來た。嗚呼、飛行機の入城式、思へば時代は急速な進歩をした。嘗て十年前旅順開城の折には、夢にも想はなかつた事である。

十年前 明治三十八年のこと。

先頭につゞいて喇叭手の一隊が通過し、其の後に乘馬の將校が數騎續いて現れた。堀内少將が大村旅團を率ゐて來たのである。足並正しく、司令官の前を通

堀内少將 名は文次郎、陸軍少將。大村旅團 歩兵第二十三

旅團、司令部は長崎縣東彼杵郡西大村にあり。



青島入城式

過するとき、つゝと馬首を廻して司令官の右に出て、刀禮を施して報告する。其の立派な英姿を見ては、男兒生まれて一旅の將とならば、また以て瞑すべしといふ感が起つた。まして今日此の處で、東亞の歴史にいつまでも遺る光輝ある入城式を行ひ、幾萬といふ

貌貅の敬禮を受ける神尾將軍の榮譽となると、人生の快事はこゝに極ると謂つてよい。當事者は傍觀者より却つて無頓著なこともある。此の時神尾中將はどんな感想を懷いてゐられるであらう。表情の乏しい顏は、遠目には一層物さびしく、白い髭のみが日に輝いてゐる。騎つたのは逞しい赤栗毛、二白で流星なのが著しく眼に著く。出よう、出ようとするのを、將軍は悠然と手綱を絞りながら、いつも同じ路上を視てゐる。

英國兵の行進は多大の興味を以て迎へられた。英語

英軍印度兵の入城　　英軍の入城

の號令は耳に珍しく、左の肩に銃を擔いでゐるのは、眼に珍しかつた。異彩を放つたのは、其の中の印度兵であつた。頭には國俗に隨つて、丈餘の布帛を捲いてゐる。赭黑い顏の大部分が漆黑な髯に蔽はれて、凄じい。亞弗利加種の黑人とは違ひ、歐羅巴人と同祖だから、骨格、相貌は十分の威容を備へ、身長は英人より高い。如何にも倔强に見える。

動作の機械的に整齊して見られるのは、天下に獨逸兵に過ぎるものはあるまい。此の點には、日本軍とても一歩を讓るやうに思はれるが、其の意氣の充實してゐるのは、我が軍を第一に置くことができよう。特に今日の分列式で予は然う感じた。

破れた軍旗の通るとき、予は脱帽しながら何となく感に迫つて、きまりが悪いほど、ほろ〳〵と涙を流した。其の次に通つた新しい軍旗に敬禮する時も、やはり泣かずにはゐられなかつた。或時は又、行進する兵士の、力みかへつて、閲兵官に一所懸命注視の禮をしながら、通過するのにも、ほろりとなつて堪へられなかつた。予は自己の感情的なことを愧ぢながら、後に他の人と此の事を語り合つてみると、案外にも、同じ衝動を受けて落涙したものが少くなかつた。

八　天橋の月夜

德富健次郎

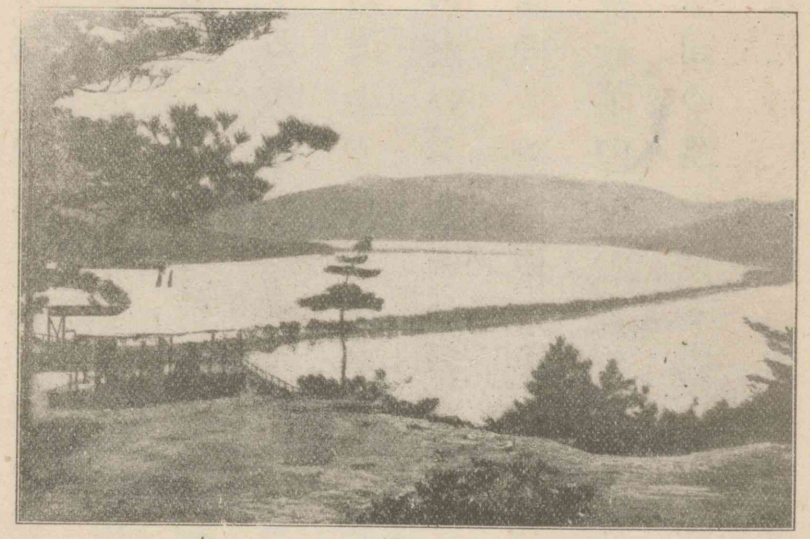
文殊寺のあたりは松蔭で、墨の様に眞黑い。此處に車を待たせ、天橋に渡らうとして、舟に乘る。所謂切戸の渡である。

ぎいと艪が響いて、舟は墨染の濃い松蔭から白々と

した月下の海に出た。海というても、淺い洲の上の水である。何といふ良い月夜か。雲一つない空にのみ照るかと思へば、水中に天があつて、其處にも月は璧のやうに光つてゐる。何といふ清い水だらう。月明りにも水底の砂が分明に數へられる。此處は橋立切戸の渡か。もしくは天河を今渡つてゐるのではあるまいか。船頭よ。ゆるやかに舟を行つてくれ。もつと徐かにやつてくれ。然し如何程徐かに行つても、彼岸は近い。する〳〵と舟はもう天橋の渚に著いて了うた。舟から上つて踏む白砂は、もう天橋立である。此處らの松は、植ゑついで間もないと見え、まだ稚木で、まばらである。月明りに雪とかゞやく砂を踏んで、だんだん奥へ入つて往く。十一月も半ばといふに、蟲の音がする。歩むにつれて、松蔭はだん〳〵深くなり、はては月光より松の影が多くなつた。

何といふ明るい月だらう。仰げば、松の一葉一葉が、白金のピンを數へるやうに讀まれ、俯く砂には、また一葉一葉の影が、黑くあざやかに讀み得られる。

松間の路の曲る處に來た。余は松の幹に倚つて立ち、友は砂に蹲踞んだ。余は默し、友も默してゐる。ひつそ



天橋立

りした天橋立に人籟が絶えて、たゞ何處からともなく、ざあ〳〵といふ音がする。松風か。否、足下の松影は、濃い墨で描いた様に、少しも動かぬ。音は與謝海が天橋一里の白砂を舐める音に外ならぬのである。その音に引かれて、汀に出てみる。

其處に二間ばかりの花崗石のベンチがある。竝んで腰をかける。月下にほの白く眠る與謝海、その懷には璧の様な月を抱き、寢息かとばかり、ざぶり又ざぶりと音して白砂浸す漣は、まるで眞珠をこぼす様。海の南に、半圓形に山下に沿うて紅寶石や琥珀の光が點點と灣を緣どつてゐるのは、あれは宮津の町である。ふと此方の海の上に不思議なものが現れた。晃々とした明珠の幾段にも列んだ、尨大な横長い物である。龍宮城の出現—。と見る間に、それは宮津の方へと動いて行く。龍宮城が移動すると見たのは、それは、今日

の最終の連絡船が、宮津を指して行くのであつた。やや暫くその行くへを見送る。龍宮城はあの宮津灣頭に、百千の龍燈のきらめく邊にぴたりと附いて了うた。あとはたゞ熨した様な與謝海が、照りまさる月の空と靜に相見て相抱き、一里の松原の枝も鳴らさぬ天橋立の長い汀に沿うて、ざぶり又ざぶりと漣のさめくばかりである。

汀からまた松原に戻つて、奥へ〳〵と砂路を歩む。さくさくと砂を踏む二人の足音の絶え間に、波のさゝめきが慕うて來る。幽に蟲の音がする。松蔭はますます深くなつて、はては砂の上にこぼれる月影が、ちらちらと螢ほどに細かくまばらになつた。と見ると、此處にひつそりと鎭ります社がある。大方、橋立明神といふのであらう。松影を浴びたその宮に、人影もない。人聲もない。燈明一つ點つてゐない。

二人は其處の松に倚りかゝつて、默つて良久しく立つた。

「歸るか。」

「うん。」

この言葉がかはされたのは、大分經つてからであつ

た。二人は松蔭から月明りに出て、砂路をぶらりぶらりと切戸の渡に來た。切戸の水は全く天河のやうに美しい。渕に立つて、むかうを見れば、眞黑い彼岸にただ一つ赤い灯が見える。文殊の渡守の小舍の灯である。

「おう、おゝい。」

渡守を呼ぶ余の聲は震るへた。銀河を渡る前、二人は月の天橋の端に立つて、暫くこの灯を眺めてゐた。

九　わが子を奉公先の主人に依頼す

謹啓。時下冷氣相催し候處、益〻御勇勝に渡らせられ、大慶の至に存じ奉り候。さて先達來、忰正太郎儀、不思議の御緣にて、尊店に御奉公相叶ひ、御手もとにて御情深く御使下され居り候由、同人の書面にて委しく拜聞仕り、誠に願うても無き仕合と、家内一同喜悅此事に存じ罷在候。御覽に相成候通りの武骨者と申し、これまで曾て親の家より外には寢泊致したる事もなき程の世間知らず、且小膽の氣隨者に候間、定めて御世話もやけ候べく、又朋輩の方々へも如何候べきかと、そ

れのみ心配仕居り候。當人へはよく〳〵申聞かせおき候につき、何卒十分御叱下され、御面倒ながら末長く御使下されたく、偏に願ひ奉り候。當人は申すに及ばず、私共も、是非とも尊店の内にて業務の事相覺え、追々一人前に相成候樣にと、切に願望致居り候事に御座候。御粗末と申し、失禮の品に候へども、手製の葛粉一箱、御目にかけ申候。御笑納下され候はば、大幸に存じ奉り候。先は略儀ながら手紙を以て御挨拶まで此の如くに御座候。敬具。

右の返事

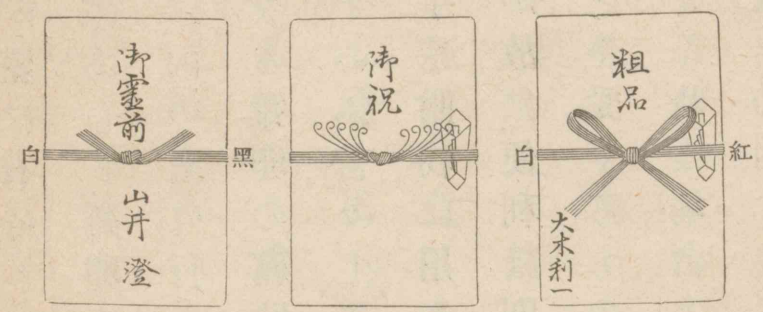
御手紙拜讀致候。誠に不思議の御縁にて、御子息事弊店の人となられ、熱心に働きくれられ、一同悦び居り候。身體は強壯、性質も實直にて、理解力あり、それに商業が何よりも好きとの事に候間、行く〳〵は立派なる商人となられ候事と信じ候。及ばずながら樂しみて御世話致すべく、たゞたゞ當人の辛抱が專要と存じ候。同輩仲も、只今の處極よろしく候間、御安心あるべく、尙御上京

の節は是非拙宅に御泊下さるべく候。珍しき品御手製の由にて、澤山に頂戴致し、辱く御禮申上候。草々。

（書翰文講話）

一〇　贈物

吉凶禍福につけて、物を贈りて慶弔の意を表するは、古來何れの國にも行はるゝ風習にして、他人の喜を以て我が喜とし、他人の憂を以て我が憂とする、美しき同情の心より出でたり。而して誕生、婚姻、葬祭等、各其の場合に依りて一定の慣習あり。此の慣習に違へ



る贈物は、却つて之を受くるものの感情を害するものなり。故に第一贈るべき品物の選擇に注意すべきは勿論、包み方、水引の結び様、熨斗の附け處に至るまで、一々法式に從ふべし。

歳暮、中元等に贈物をなすは、恩を謝し、勞に報ゆる心なるべし。かくの如き贈物は能く先方の用不用を考へ、用ゐて便利なるものを贈るべし。我

が家に有餘りて、用なきが爲に、之を贈るが如きは、禮にあらず。雞卵を贈るに、甲の家より乙の家に贈り、更に丙の家に行き、丁の家に移り、轉々する間に、折の中なる雞卵の腐敗して、用をなさざるに至ることありといふ。苦々しき限なり。呉服、太物、菓子、ビール等の切手を贈物に用ゐるは、隨時に現物と引換ふるを得るが故に、便利は則ち便利なれども、餘り實利に流れて、之を受くるものに、不快の念を抱かしむることあり。よく時と場合とを考ふべきなり。

人を訪問するに、手土産を携ふることあり。我が庭園

に熟したる果物、我が村、我が町に産し、先方にて珍重するが如きものを、よき序なりとて持ち行く深切なる心より出でたるものにて、是己れの欲する所を人に施すなり。然るに此の事、何時しか一種の虚禮となり、何等の意味なきものを贈ることあり。甚だしきは手土産を携へずして人を訪問するを、非禮の如く考ふるに至り、爲に親戚、故舊間の往來もおのづから稀に、交情も亦うとくなり行くこと多し。

旅行して土産を贈るも亦同じ。旅行せし地方の特有物産にして、其の地の記念となるべきもの、又は我が

親族、知友等の平素最も愛好するものを、異郷に求めて之を贈るは、温き友情を示す所以にして、最もゆかしきものなり。然れども土産物を贈らざれば禮を缺くものと心得、勉めて何物かを持ち歸るは、却つて人情に外るべし。

凡そ贈物をなすには、能く其の場合を考へ、場合に適合するものを選ぶべく、又我が身分を顧み、身分相應の物を贈るべし。場合に適合せず、身分不相應の贈物をなすは、禮にあらず。深切の至情を缺ける贈物は初より之を贈らざるに如かず。

（高等小學讀本）

一一　兎狩

徳富健次郎

收穫が濟む。霜が降る。裏山の楓が染まる。すると兎狩の季節がそろ〳〵始る。つくろひに遣つてあつた網も出來て來る。何日は兎狩といふ貼札が出る。脚絆、草鞋の用意に急がしくて、僕等は何も手に著かない。

愈その日になつた。炊事番は夜半に起きて、握飯を拵へる。皆が支度して塾の庭に勢揃へする頃は、午前三時過でもあらう。月が白く冴えて居る。三たび鬨の聲を揚げて、月影を踏んで出かける。大人組は網をかつ

いで、高らかに詩を吟じて行く。僕等は默つて、併し心は得々として、ついて行く。

ねむさうな鷄の聲のする村も過ぎ、けたゝましく犬の吠えかゝる村も過ぎ、野路を通り、谷川を越え、もう一里半も來たらう。月が落ちて、野は一面の曉闇、前に行く者の姿もはつきりとは見えぬ。ふと、すばらしく大きな、眞黑なものが、鼻の先に現れる。山だ。目的の山だ。まだ早い。皆焚火をしながら天明を待つて居る。僕は藁の上に寢ころんで居ると、背は寒いが、顏や腹は焚火で暖だ。炎々と立昇る焰の間に、ちら〳〵見えて居た一同の赤い顏が、次第に遠くなつて、ついうつとりと一寐入したと思へば、起される。眼を摩つて起き上ると、成程天明だ。東が白んで、曉の風が切る樣に面を吹く。焚火の跡だけ黑い圓を描いて、四邊は一面の霜だ。やがて勢揃へして山へ向かふ。進軍の號令がかゝる。鬨の聲が一時に揚る。二山も追ふ頃は、もう朝日が晃々と秋の空に昇つて居る。

今おもうても愉快だ。秋が黃に、紅に、紫に、鳶に、あらゆる彩色の限を盡くした木を押し分け、葉を打ちはらひ、聲をあげて登る心地。網近くまで追ひつめて、如何

兎狩

をして、攻寄せる勢子の叫の間近になるに、兎のうの字もかけて來ず、あゝだめと落膽する時、突然がさがさと音をさせて、覗く鼻先へ飛び込んで、二つ三つ網ながらにとんぼがへる兎を、樹蔭から飛びかゝつてかと思つて居る時、何處からか「とれた」といふ聲がして、吾知らず棒を振つて勝鬨をあげる心地。網番

押さへる心地。落葉かき分けて、谷川の水を口づけに飲んで、木の根、草の上に脚投げ出して、握飯にかぶりつく心地。食つてしまつて、落葉の床にあをむきに臥して、碧玉よりも澄んだ空を眺めて、汗ばんだ顔を冷々した風に吹かせる心地。數へ立てると、際限も無い。秋の日の短さ、まだ三匹しか取れぬに、もう鴉が鳴き出した。遙に見える湖や川は、金のやうに夕日に閃いて居る。獲物は蔦葛で四脚を縛つて、大人組が舁いて、とくに還つた。僕等は紅葉の枝を折つて、ぶら〳〵後から還つて行く。山を降りて、野に出ると、日は彼方の

森に沈んで、夕煙が村々に立ち昇る。と思ふと、薄紫にけぶる野末に、大きな月が顔を出す。その月がやゝ高く、やゝ小くなつて、うちつれて歩み行く影の大分短くなる頃には、僕等はもう塾に歸り著いた。

草鞋をぬいで、顔を洗つて、先生はじめ一同大胡坐で、てんでに兎汁を盛つて、飯を食ふ。この兎汁は別名を大根、胡蘿蔔、牛蒡、燒豆腐、蒟蒻といふのではあるまいかと思ふ程、正身は少い。併しその味、否、それよりも食つてしまつて、著物も更へず、ぐつすり寐る時の心地は、何ともいへない。夢も見ない。身うごきもしない。翌朝の九時頃までは、死骸も同然だ。

一二　北海の紅葉

角田浩々

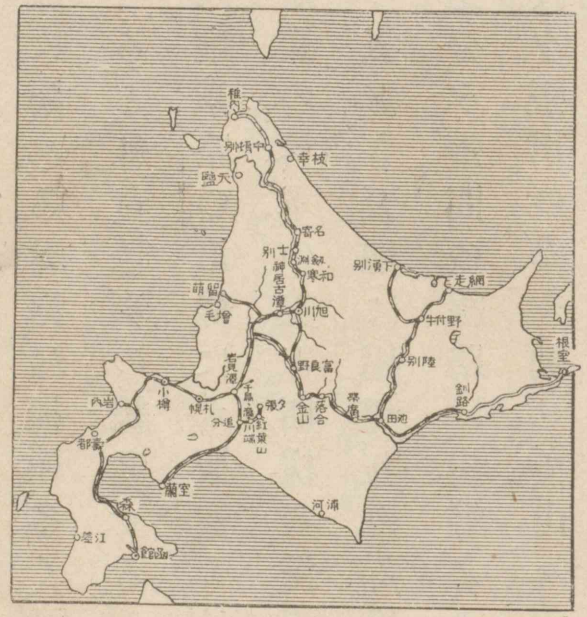
北海道の冬季は、白乾坤なり。知人よりの來報に「我が雪國の乾坤は、君が去つて後、局面一變、恰も水晶世界となり、滿目唯白皚々。ふかも枯林に咲ける雪花の壯觀に至りては、一段の風趣、何の辭を以てか報ずべき。」とあり。予は今の白乾坤を想望しながら、昨の紅黄世界を懐ふ

札幌より旭川に至る道に名高き神居古潭はあり。汽

車の窓より飛泉、奇岩、碧流、紅葉の美を瞰下し得。その道程一里餘、北海道鐵道の沿線に於ける絶勝たり。予は前に九月三十日之を過ぎ、後に十月五日の午後六時再過す。再過は正に是夕陽黄葉の時、江流杳然、危橋と對岸の一路とほの白く見え、山峽に夕陽殘りて、昏黄の色、谷を罩め、人家に焚く火の煙、歸雲の如くたなびき、板葺屋根の下

神居古潭

に人の足見ゆ。高きを馳せて低きを見る氣味、杳(ハルカ)にして深し。



旭川より北方名寄に至る間、和寒、劔淵、士別の邊、旭川より釧路に至る間の富良野、金山、落合の諸驛、池田、陸別間、追分、夕張間は汽車の兩方、山皆深林、林皆紅黄、寥廓なる碧天と澄清の瀛氣とに渲染の妙を極む。秋の北海道旅行者は、何人も

極彩色の幔幕を張りたる中を歩む心地せん。

金山は富士製紙會社第六工場の所在地、空知川の溪流に臨める林樾は楓樹多く、林間に瓦棟板扉の隱見せると、紅黃色彩の繚亂せるとは、殊に旅客を歡ばす。

內地鐵路の沿線にも斯樣の林木、溪流無きにあらず、斯樣の林木の美と斯樣の溪流の美との、絕えて塵土の氣無き天地に相契りたる風景、鮮きなり。

追分、夕張間の線路は、川端より紅葉山に至る邊、汽車は夕張川の岸を馳せて、山々水々を眺む。川の瀨をなし崖を落つる處に、千鳥瀧あり。二十分許の間、人は唯

紅葉黃樹の美觀に醉はざるを得ず。千山萬壑、名狀指點に遑あらず。京の嵐山を知るものは、此に嵐山の春を笑はんとす。

予が過ぎたる時は、神居古潭を經しと同じく、夕暮にして、新月恰も溪流の白き、林木の紅黃なる、山上に出で、纖々の光かすかに車窓を覗ふ。同車の鐵道院技師は聲を發して、絕勝を叫ぶ。予は之を感ずることは先なりしなるべけれども、之を叫ぶことは工業家に後れたり。

予は內地にありて、斯かる紅葉美を見しことなく、ま

た斯かる紅葉美を映發せしむる瀕氣の澄清を吸へ
ることなし。秋の北海道はオゾンの供給地にして、龍
田姫の王國たり。

オゾン　酸素と同じき元素より成れる氣體にて、酸素よりも性質强烈なり。

一三　歳暮

中邨秋香

霰たばしり、風荒れて、
人足しげき八街に、
門松ひさぐ聲すなり。
ことしもやがて暮れんとや、
暮れんとや。

花にやどれる春の鳥、
千草に眠る秋の蝶、
結びもとめぬ夢のまに、
はや一年は過ぎにけり、
過ぎにけり。

書讀む窓の夜の雪、
闇は照らさで、いたづらに
頭にのみや積るべき。

たゆまず學べ、時の間も、
時の間も。

一四　私の母

夏目漱石

私は母の記念の爲に、何か書いて置きたいと思ふが、生憎私の知つてゐる母は、私の頭に、大した材料を遺して行つてくれなかつた。

母の名は千枝といつた。私は今でも此の千枝といふ言葉を、懷かしいものの一つに數へてゐる。だから私には、それがたゞ私の母だけの名前で、決して外の女の名前であつてはならない樣な氣がする。幸に私はまだ母以外の千枝といふ女に出會つた事がない。

母は私の十三四の時に死んだのだけれども、私の今遠くから呼び起す母の幻像は、記憶の絲をいくら辿つて行つても、お婆さんに見える。晩年に生まれた私は、遂に母のみづ〳〵しい姿を覺えずにしまつたのである。

私の知つてゐる母は、常に大きな眼鏡を掛けて、裁縫をしてゐた。其の眼鏡は鐵緣の古風なもので、玉の大きさが直徑二寸以上もあつたやうに思はれる。母は

それを掛けた儘、すこし顋を襟元へ引き付けながら、私を凝と見る事が屢あつたが、老眼の性質を知らない其頃の私には、それがたゞ母の癖とのみ考へられた。私は此の眼鏡と共に、何時でも母の背景になつてゐた一間の襖を想ひ出す。古びた貼交ぜの中にあつた、生死事大無常迅速云々と書いた石摺なども、鮮に眼に浮かんで來る。

夏になると、母は始終紺無地の絽の帷子を著て、幅の狹い黑繻子の帶を締めてゐた。不思議な事に、私の記憶に殘つてゐる母の姿は、何時でも此の眞夏の服裝で頭の中に現れるだけなので、それから紺無地の絽の著物と幅の狹い黑繻子の帶とを取り除くと、後に殘るものは、たゞ母の顏ばかりになる。母が嘗て緣鼻へ出て、兄と碁を打つてゐた樣子などは、この二人を組み合はせた圖柄として、私の胸に收めてある唯一の記念なのだが、其處でも母は矢張同じ帷子を著て、同じ帶を締めて坐つてゐるのである。

母が父の所に嫁にくる迄、御殿奉公をしてゐたといふ話も、朧氣に覺えてゐるが、何處の大名の屋敷に上つて、どの位長く勤めてゐたものか、御殿奉公の性質

すら能く辨へない今の私には、たゞ淡い薫を殘して消えた香のやうなもので、殆ど取り留めやうのない事實である。

然し、さういへば、錦繪に描いてある御殿女中が羽織つてゐるやうな、華美な總模樣の著物を、宅の藏の中で見た事がある。紅絹裏を付けた其の著物の表には、櫻だか梅だかが一面に染め出されて、處々に金絲や銀絲の刺繡も交つてゐた。是は多分當時の裲襠とかいふものだらう。然し母がそれを打掛けた姿は、今想像しても、丸で眼に浮かばない。私の知つてゐる母は、

常に大きな老眼鏡を掛けたお婆さんであつたから。それのみか、私は此の美しい裲襠が其の後小搔卷に仕立て直されて、其頃宅に出來た病人の上に載せてあつたのを見た位だから。

一五　中江藤樹

橘南谿

寛永の頃、加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて、京へ上るに、江州河原市より馬を雇ひて、榎木の宿に泊りぬ。馬方は、河原市に歸り、馬を洗はんとて、鞍を解きたるに、鞍の下より財布一つ出でたり。取上げて見れば、

寛永　二百七八十年前の年號。
河原市　滋賀縣高島郡にあり。
榎木　同縣滋賀郡にあり。

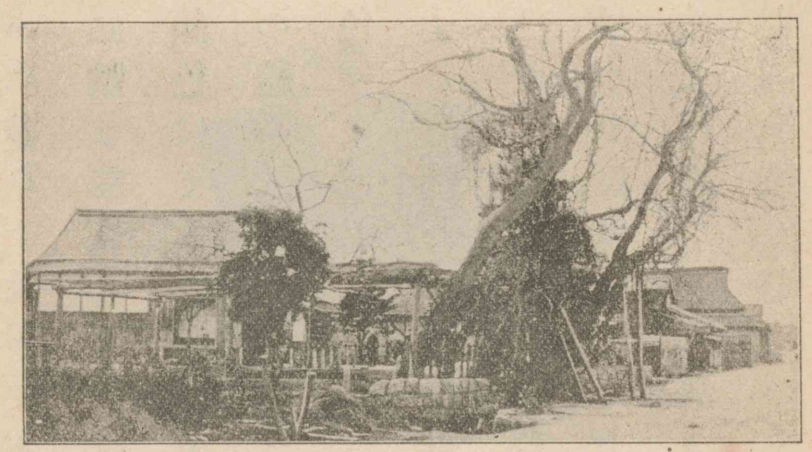
金二百兩あり。馬方大いに驚き、「今の飛脚の取忘れたるにこそ。」と思ひ、そのまゝ榎木に走り行きて、飛脚の宿に至り、對面して委しく尋ね問ふに、相違無ければ、その金を取出して返しけり。

中江藤樹

飛脚は死したる者のよみがへりたるこゝちして、喜のあまり、行李より別の金子十五兩を取出して、馬方に與へ、「もしこの二百兩なくば、己が一命を失ふのみならず、親兄弟までも重き罪に至らん。されば、そこの恩なかゝ言葉のいひ盡くすべきにあらねども、まづ當座の御禮まで

に贈り奉る。」と、涙を流して喜ぶ。馬方大いに驚きたる顏色にて、「そなたの金をそなたに取り納め給ふに、何の禮いふことあるべき。」とて、手をだに觸れず。

色々にこしらへいへども、更に受けずして、歸らんとする故、已むことを得ず、十兩に減じ、五兩となし、三兩となし、段々減じて、終には金二歩となし、「せめてこればかりは吾が悅のしるしなれば、受け給ふべし。さなくては、吾が心も濟まず、今宵も寐ね難し。」と理を盡くし、詞を盡くしていふにぞ、「この金を受くる程ならば、



藤樹書院(滋賀縣高島郡青柳村大字小川)

二百兩をも留め置くべし。かく返し奉るからには、聊かにても謝禮を受くるは、吾が心にあらず。さりとて餘儀なく仰せらるれば、さらば鳥目二百文を賜はるべし。これは、今夜休むべき所を、これまで追ひかけ來れる賃錢なり。これは吾が取るべき錢なれば、申し請くべし。」といひ、さてその

二百文にて酒を買ひて、その人に振舞ひ、己れも醉ふほど飲み、やがて歸らんとす。

飛脚は感に堪へかね、「さるにても、そこはいかなる人にておはする。」と問ふに、「名ある者にあらず、又何一つ知れる者にあらず。只吾が在所の近所に小川村といふ處あり。この村に與右衞門といふ人おはして、夜毎に講釋といふことをす。某も折々行きて聞き候ふに、『親には孝を盡くすべし。主人は大切にすべきものなり。人の物は取らぬものなり。無理非道は行ふべからず。』などいふこと、常に語り給ふにより、今日の金子も

。

吾が物にあらざれば、取るべき理なしと、心得しまでのことなり。」といひすてて、歸りぬ。與右衛門とは中江藤樹先生のことなり。

飛脚はそれより京に上りて、いつもの宿に至り、「さてもこの度は辛き命生き延びて、各方にも對面することとなりぬ。」とて、ありし次第を委しく語りけり。折節その家の裏に熊澤治郎八、田舍より上り居て、學問修行の最中なりしが、この物語を聞きて、「その人こそ誠

熊澤蕃山

蕃山自署

熊澤治郎八名は伯繼、字は了介、蕃山と號す。

の儒といふものなれ。」とて、その翌日すぐに江州に赴き、小川村を尋ねて、隨從を願はれしに、「人に教ふる程の學德なし。」とて、更に許し給はず。熊澤ひたすらに願ひて、二日が間、先生の門に佇みて歸らず。先生の老母氣の毒がり、「ともかくも内に入れ申せ。」とありしかば、いなみ難くて、内に入れ、遂に師弟の契約をせられけりとぞ。

その後、先生を備前侯の招き給へる時、己れは病身なりとて固く辭し、「門人熊澤といふ者あり、御役にも立つべき者なり。」とて、熊澤を出されけり。いづれも格別

備前侯　池田光政。備前岡山藩主。

のことなり。

一六　雪合戰

大町桂月

學校へ行く途中から、雪がちら〳〵と降り出した。第一時間目の授業が終つた頃には、もう、そこら一面眞白になつた。雪はます〳〵降りしきる。第三時間目がすんだ時、「午食後、雪合戰をやります。」と、校長が言はれたので、皆が勇み立つた。

運動場に出ると、雪は膝まで積つて居る。組々の席順の奇數に當るものを東軍とし、偶數に當るものを西軍とした。西軍は赤い巾を、東軍は白い巾を、一人一人腕にまいた。兩軍とも、各一旒の旗を押立てて居て、敵軍からそれを奪ひ取つて來れば、勝といふことにした。私は西軍の方である。

一聲の喇叭を合圖に、兩軍とも、守備隊と攻擊隊とに分れて、戰鬪を始めた。私は攻擊隊に加つて前進した。鬨の聲がどつと擧つて、雪の彈丸が一時に亂れ飛んだ。兩軍の相近づくにつれて、雪を握る手が、ます〳〵いそがしい。やがて接戰となると、もう雪などを握つては居られない。すぐに組打になつてしまふ。彼方で

雪合戰

も此方でも搭闘が始つた。私はわれこそ敵の旗を奪ひ取つてくれようと、驀地に進んで行くと、敵の一人が前に立ち塞がつて、遣らぬと妨げ、二人三人それに加つて來て、私は忽ち重圍に陷つた。組んづ、ほぐれつ、闘つて居るうちに、休戰の喇叭が鳴つた。あゝ、わが西軍の旗は、遂に東軍に奪はれたのである。

赤白の巾をかなぐり棄てると、もう敵でもなく、身方でもない。雪にほてつた手と手とを互に握りあつて、

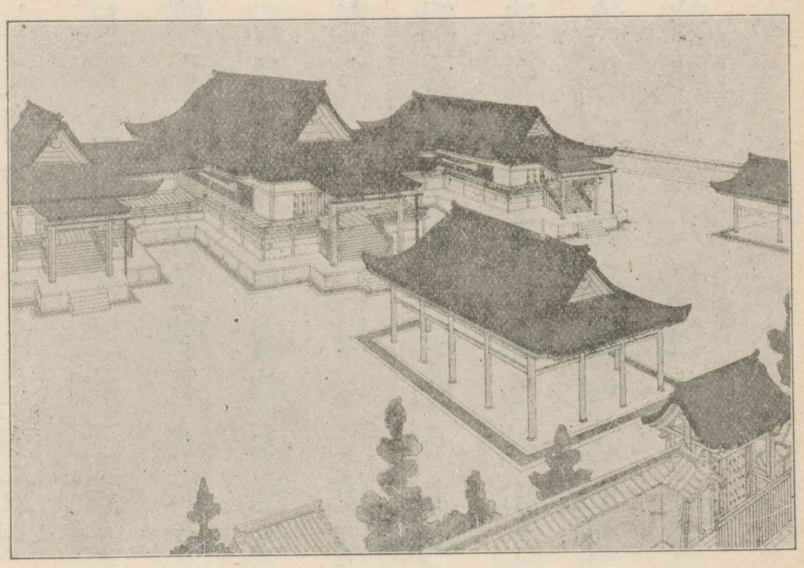
「やあ、君、愉快だつたね。」

一七　賢所

賢所は、宮城内なる吹上御苑の辰巳の方にあり。皇大神の御靈代なる神鏡を齋き奉らせ給ふ所なり。宮中恆例の御祭典あるは申すまでもなく、國家に大事あるときは、必ず奉告の御儀を行はせ給ふ。皇室の大婚及び皇族の御婚儀等もその御前にて擧げさせ給ひ、

また皇子御誕生、御命名の奉告、親謁の御例あり。文武官を海外に遣はし給ふをり、また命を終へて歸朝したるをりにも、必ず參拜を仰付けられ、また毎年六月末日及び十二月末日には、大祓を行はせ給ひて、文武百僚の總代を前庭に召して、參列せしめ給ふ。賢所は皇室の宗廟にして、また全國民の宗廟なれば、その御祭典は實に國家の重大事なり。

謹みて賢所の御由來を按ずるに、天照大神、八咫鏡を天孫天忍穗耳尊に授け給ひて、「吾が兒、此の寶鏡を視んこと、なほ吾を視るが如く、床を同じくし、殿を共にして、齋の鏡となせ。」と宣へり。斯の如くして、この御鏡は叢雲劍、八尺瓊曲玉と共に、三種の神器として、歷代傳承し給ひ、神勅のまに〳〵同床共殿にして、齋き奉らせ給ひしを、崇神天皇の御代に至りて、神威を瀆し奉らんことを畏みて、倭國笠縫邑に移し奉り、皇女豐鍬入姫命をして祀らしめさせ給ひ、別に宮中には摸造の神器を止めさせ給ひしこと、史に見えたり。その後、更に天祖神授の八咫鏡は、天祖の御形代として伊勢神宮に、八尺瓊曲玉は宮中に、草薙劍は熱田神宮に、をさまらせ給ふこととなれり。



宮中三殿

（中央は賢所、その御右は皇靈殿、御左は神殿）

宮中正殿にましましし神鏡は、その後溫明殿に移らせ給ひ、久しくそこに齋き祀りてありしが、後世、大内裏頽廢して、里内裏となりてよりは、春興殿に遷らせ給へり。

かくて明治二年三月、都を東京に奠め給ひたるとき、舊皇居に遷座し奉り、明治四年九月、詔して新に神殿を宮中山里の御内庭に作りて、神鏡と皇靈とをこゝに奉安し給ひしが、同六年五月、皇居炎上したれば、神鏡は赤坂假皇居に遷らせ給へり。同二十二年新皇居の御造營成りて、遷幸あらせ給ふや、宮中に今の賢所を建てて、神鏡をそこに遷し奉り、同時に皇靈殿竝に神殿をその左右に建てて、皇靈と神祇とを齋き奉らせ給ふこととはなれり。宮中三殿と申すは、卽ちこれなり。（國家の祭祀による）

一八　紀元節

紀元節ハ、神武天皇中州ヲ平定シテ、大和ノ國ナル畝傍ノ橿原宮ニテ、御卽位ノ禮ヲ行ハセラレタル日ヲ記念スル爲ニ、定メ給ヘル祝日ナリ。此ノ日、天皇陛下ハ、皇靈殿ニ於テ御親祭ヲ行ハセ給フ。

其ノ御次第ハ、午前九時、御殿ノ御裝飾ヲ奉仕シテ、朝ノ御祭典アリ。午前九時三十分ヨリ更ニ御親祭ノ儀アリ、午前十時、出御、皇靈殿ニ御玉串ヲ奉ラセ給ヒテ、御拜アリ、御告文ヲ奏シ給フ。次ニ賢所御拜アリ。畢リ

テ入御アラセラル。續キテ皇后陛下、皇太子殿下、同妃殿下ノ御拜、親王以下ノ拜禮、參拜等アリ。午後五時ニハ更ニタノ御祭典アリテ、御神樂ヲ奏セラル。

是ヨリ先、陛下、御親祭ヲ濟マセ給ヘバ、諸臣ノ參賀ヲ受ケサセ給ヒ、午前十一時、豐明殿ニ出御アリテ、群臣百官ニ酺宴ヲ賜フ。御宴ノ間ニハ、伶人前庭ニテ舞樂ヲ奏ス。

抑〻神武天皇御卽位ノ日ヲ以テ國家ノ大祝日ト定メラレタルハ、明治五年十一月十五日、

第一月廿九日神武天皇御卽位相當ニ付祝日ト被

定例年御祭典被執行候事

ト、布告セラレタルニ始レリ。尋デ翌六年一月四日、五節供ヲ廢シテ、右ノ御卽位當日ヲ天長節ト共ニ祝日ト定メラレ、更ニ同年三月七日、此ノ日ヲ紀元節ト稱セラルヽコトトナレリ。翌七年、一月二十九日ヲ太陽曆ニヨリテ推歩シテ、二月十一日ヲ其ノ日ト定メラレ、カクテ今日ニ至ルマデ改ルコトナシ。

神武天皇御卽位ノ年ヲ基本トシテ、年曆ヲ數フルコトハ、極メテ古ク、弘仁曆運紀ニハ、此ノ年ヨリ嵯峨天皇ノ弘仁二年マデ、合ハセテ千四百七十一年ナリト

アリ。維新ノ後、明治三年、横山由清モ、曆運紀ト同ジク、神武天皇御卽位辛酉ノ年ヲ紀元トシテ計算シ、其ノ考文ニハ

開闢以來、神武天皇卽位前七年甲寅ノ年マデハ、年數ノコト、正シキ古書ニ確徵ナシ。神武天皇卽位元年辛酉ヨリ今茲明治三年甲午マデ二千五百三十年、云々。

ト云ヘリ。今日用ヰル年數ハ卽チ之ニ據レリ。

惟フニ、我ガ國ノ紀元ハ、實ニ世界無比ノモノニシテ、諸外國ガ革命、簒奪ニヨリテ已ムヲ得ズ耶蘇誕生ノ

紀元ナドヲ用ヰルトハ、日ヲ同ジウシテ語ルベカラズ。況ヤ、其ノ年數ノ二千五百以上ヲ數フルニ於テヲヤ。

寶祚ノ隆ナルハ、實ニ天壤無窮ナリ。サレバ國民タルモノハ、此ノ佳節ニ遇フ毎ニ、遠ク建國ノ古ヘヲ懷ヒ、神武天皇ノ御功德ヲ仰ギ奉リテ、メデタキ大御國ニ生マレ、皇室ノ鴻恩ニ浴スル身ノ幸福ヲ感謝シ奉リ、片時モ報效ノ念ヲ忘ルベカラザルナリ。（雲上祕錄ニ據ル）

一九　貯金の義務

村岡恒利

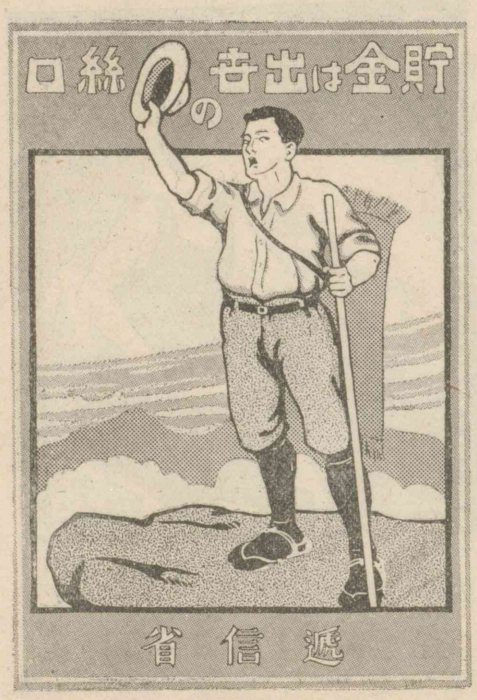
およそ人は道德上一つの義務として、常に貯金を缺いてはならぬ。然るに今尙我が國の多くの人は、一錢の端錢でも貯蓄しようと心掛ける人を見ると、それを冷笑する惡い慣習がある。かういふ人達は、平素金錢の有る間は元氣がよく、金使のさつぱりした男らしいといふ點が無いでもなからうが、一たび不如意の境遇に陷つた場合は、それこそ一錢の端錢にも困つて、二進も三進も行かなくなり、恰も喪家の狗のやうな憐な態を見ることになるのである。

斯樣に金錢といふものは、一錢の端錢でも、或場合に

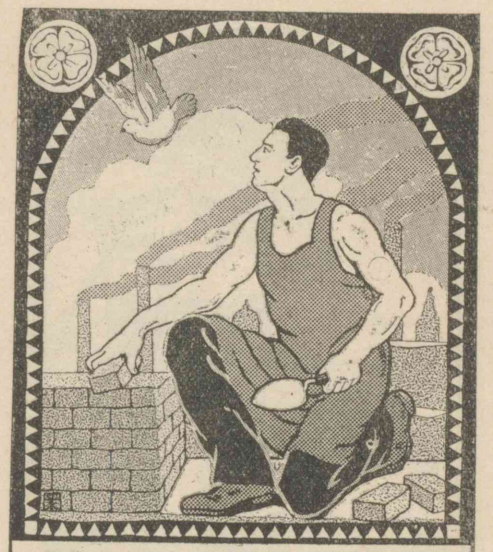
は人に苦痛を感じさせるほど貴重なもので、僅ばかりの端錢を貯蓄した所で、何の足しにもならないと思ふのは、大きな料簡違ひである。今我が國の人が一日一錢を貯蓄するとしたら、その額は全體で一日五十八萬圓、最も少く見積つて一年には二億圓以上にもなつて、僅一錢の貯金が延いて國力の強弱にも關する次第

にもなるのである。或學者は國は一錢を以て興り、一錢を以て滅ぶと云つたが、寔に至言である。

加之、金錢の貯蓄は、個人としても、家庭生活上並に社會生活上、負はねばならぬ重大な義務である。即ち吾々は、家庭では父母妻子を養ひ、進んでは父母には十分に孝を盡くし、子女を完全に教育しなければならぬ。且人は



「老少不定」といひ、「一寸先は闇」ともいふから、病氣その他の災難、死後の家族の生計、自分の老後の休養の事などを慮つて、平生からその準備をしなければならぬ。又社會上では、交際に關しても自分の體面を保つことを思はなければならぬ。これらは皆相應の金錢がなくては出來ぬことである。



西洋でも或人は、「およそ金錢の使用を愼む所以は、自主自立の幸福を全うするがためである。それ故、吾等は如何にして金錢を得、如何にしてこれを貯蓄し、如何にしてこれを使用するか、或は如何にして老後の準備をするがよいか、又如何にして子孫に殘すがよいかなど、さまざま吾等の考慮を要する次第である。蓋し人の美德とする忠孝、信義、寬恕、清廉、仁惠等も、その惡德とする譎詐、酷薄、貪慾、吝嗇等の如きも、多くは金錢の有無から生じるものである。」と云つて居る。實に人は道德上一つの義務として、平素金錢の貯蓄を

缺くことがあつてはならぬのである。（從業の道による）

二〇　カーネギー

米國の富豪といへば、直ちにカーネギーを想ひ起すべし。この人、單に莫大なる富を有するのみならず、その富を散じて、人道の爲、平和の爲に費すを惜しまず。實に近世富豪の模範たるべき人なり。

偉大なる世界的富豪カーネギー、彼何者ぞ。彼は如何にして數億の富を作りしか。吾等はこの人の傳を讀み、その嘗て絲卷小僧たり、汽罐火夫たり、電信技手たりしことを知るに及びて、益〻之を尊敬せざるを得ず。而してその有する莫大なる富が、一代の間に作り上げられたるものなるを聞けば、そゞろに不可思議の感に堪へざるなり。

スコットランド　イギリスの一部。ダンファームリン市　スコットランドの東南部にあり。

アンドリュー＝カーネギーはスコットランドのダンファームリン市なる機業者の家に生まれたり。彼の十一歳の時、その家、生計困難となりしかば、一家四人、米國に渡りて、ペンシルヴァニヤ州ピッツバーグ市に移住し、父は某木綿工場に職を求めて、辛うじて一家を支へたり。カーネギー十二歳にして、亦父の勤むる工場の絲

卷小僧となり、一週一弗二十仙の工賃を受けたりしに、忽ちその勤勉、勵精を監督者に認められ、擢でられて、翌年早くも責任重き汽罐火夫となれり。二个年の後には更に又電信技手となりて、通信事務に從事し、漸く進みて、十六歳の時には、年俸六百圓を受くるに至れり。この間カーネギーは學校に入ることを得ず、また正則の教育を受くること能はざりしかば、業務の餘暇に書籍、新聞紙等を讀みて、見聞を博め、知識を養へり。

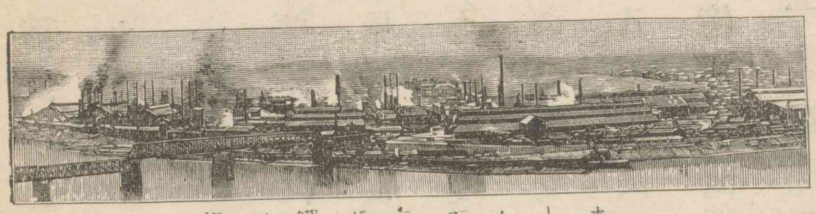
やがてカーネギーの非凡なる才幹は、同郷人なる某

南北戰役米國の内亂なり。

鐵道會社支配人トーマス=スコットに知られ、同社の電信技師兼運輸係に擧げられて、年俸七百圓を給せられたり。これよりカーネギーはスコットの股肱となりて、會社のために盡力し、その名漸く儕輩の間に聞ゆるに至れり。一八六一年南北戰役起りて、スコットの陸軍次官に擧げらるゝや、カーネギーも亦出征して、交通任務に從事したるが、敵彈に中りて負傷し、これより大いに戰爭を憎むの念を生ぜり。後年彼が平和思想の鼓吹に力を用ゐるに至れるは、その由つて來る所、蓋しこゝに存するにあらざるか。

その後、カーネギーはウッドラフ寝臺會社及びコロンビヤ石油會社に關係して、多額の利益配當を得、一方にては地位頻に進みて、ペンシルヴァニヤ鐵道會社ピッツバーグ區の監督部長となれり。この時、鐵道線路中の木橋を鐵橋に改め架したるに、非常に良好なる成績を得たれば、烱眼なるカーネギーは早くもこゝに著目して、將來鐵橋の有望なることを知り、その鐵材を供給せんがために、友人と共にキーストン橋梁工場を設立して、オハイオ州の大鐵橋を架設し、莫大なる利益を得たり。

オハイオ州ペンシルヴァニヤ州の西に隣る。



ホームスステッド鐵工場

こゝにカーネギーは鐵道會社を辭して、獨立して事業を經營し、著々と功を收めたれば、名聲隆々として揚れり。その後、更に多くの鐵山を買收し、採掘したる鑛石を運搬せんがために、獨力を以て百八十六哩の鐵道を敷設し、かくて遂に世界の大富豪を以て稱せらるゝ基を作れり。その經營に屬するホームステッド鐵工場は、敷地二十餘町歩に餘り、職工四千以上に上りて、機械の精巧なること、天下第一の

稱あり。この他、各都市に散在する支店を合はすれば、カーネギーの使役者十三萬五千人の多數に達すといふ。その盛況想ふべし。

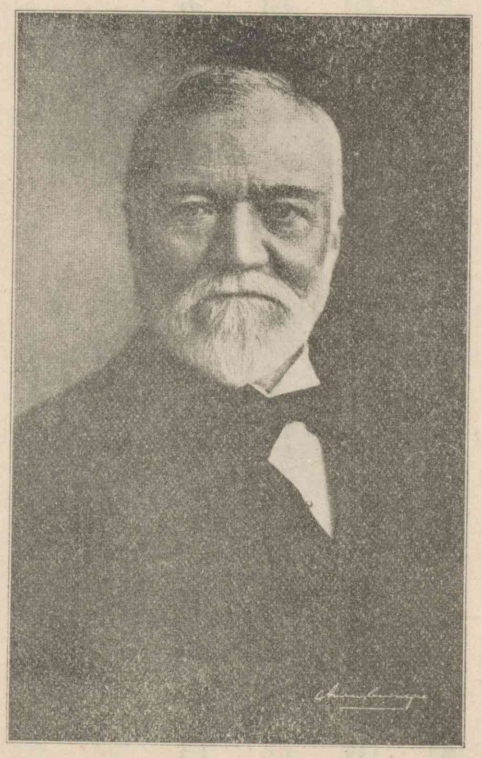
要するに、カーネギーは甚だ怜悧なる人にして、機を見るに敏なること、常人の企て及ぶべからざるものあり。逆境を轉じて順境に向かはしめたるは、一にこの怜悧なる天性の然らしめたる所なり。この人、今年八十歳に達し、今まで公共事業に費したる金額は三億五千萬弗に上れり。而してその現在の私財は僅に二千萬弗程に過ぎざるが、この二千萬弗も生前に全部公共事業に投ぜらるゝ豫定なりといふ。その富豪としての義擧は、何人も賞讃せざるなし。（清貧論による）

今年大正五年。後三年大正八年八月歿す。

二一　カーネギーの教訓

カーネギーは自己の雙腕を以て自己の進路を開き、自己の兩脚を以て自己の道途を進み、絲卷小僧より起りて、成功の絶頂に昇れり。其の出處、進退の公明なる、言行、氣魄の正大なる、聊かも醜陋の痕なし。眞に正逕を辿りて商界に身を立てんとする者の最高師表なり。而してその片言なほ天下の法となすべく、隻語

亦以て後進の則となすべし。今カーネギーの自ら言ふ所によりて、その所謂成功の祕訣に就いて記さん。」



カーネギー

かれは飲酒に次いで投機を誡めて曰く、「投機に手を出して、失敗せざる者なし。啻に產を破るのみならず、亦實に身を破る。實業家に最も大切なるは無垢の信用なるが、こは周到なる用意、規律

ある行動、潔白なる節操より生ずるものなるを忘るべからず。而して一度、投機に手を出せりとの噂を生ぜんか、信用は忽ち地に墜ちん。これ當然なり。何人か破滅するの虞あるものを信用せん。要するに實業に志す者は奇利を想はず、僥倖を賴まず、勤勉力行、漸を以て大を成すを覺悟すべきなり。」と。

かれは次に他人の負債に裏書するを誡めて曰く、「友人の懇請を謝絶するに忍びず、妄に他の負債に裏書するは、最も危險なり。已むを得ずんば、抵當を出し遣るべし。友人の成功を冀ふ爲に盡くすべき程度、及び

自己の面目を保つ爲に執るべき界線は、唯此の一事に止る。裏書は贈與と知るべし。されば裏書をなす前にまづ自分は對手にそれだけの贈與をなす義務ありや否や、一考すべきなり。」と。

又昇進の祕訣を說いていふ。「主家の利益の爲には、自己の義務以上の事をなすべし。時として其の命令、規則に悖るもよし。これ昇進の祕訣なり。」と。富豪たらんとする者に必要なる資格を論じて曰く、「常に支出をして收入に超えざらしむべし。其の剩し得る所如何に少許なりとも、必ず貯蓄し、更に最も安全にして最も利益ある方面に放下する心掛を要す。貯蓄は信用を得るの基礎なり。實業家に最要必須なるは、資本にあらずして、貯蓄なり。寧ろ貯蓄を作る克己、節制の力なり。」と。かれは堅忍の必要を說き、「才能あり、不撓不屈の氣力ある青年の身を立てんとするには、舞臺を都會の地に擇ぶべし。」と言ひ、何人も他に異なる特徵ありと論じて、「腦力の市價は其の多きに伴なうて寧ろ騰貴すべし。」と言へり。かれは「世には成功の機會を得ざりきとか、或は主人が伎倆を認めざりきとか言ふ者あれど、これ甚だしき誤解なり。眞實、職務に精勤に

して、機會を得られざる筈なし。」とて、罪を他に嫁する者を嗤へり。

（近世泰西英傑傳）

二二　老僧の接木

室鳩巣

寛永の頃、將軍家谷中（なか）わたり（邊）御鷹狩あり、御徒歩にて、此處彼處、過ぎがてに御覽ましましけるが、圖らず一つの寺に御入ありき。をりふし住僧はや八旬に及びたるが、庭に出でて自ら接木して居けるに、御供の人人遲れて、御側には二人三人附き奉れるのみなりしを、なかく〳〵やんごとなき御方とは思ひよらねば、そのまゝ背き居たりけり。

將軍家征夷大將軍德川家光。

谷中今の東京市上野公園の西北方。

將軍家「坊主何事するぞ。」と仰せられしかば、老僧心に怪しと思ひて、いとはしたなく、「接木するよ。」と御答申しけるに、御笑ありて、「老僧が年にて今接木したりとも、その木の大きになるまでの命も知り難し。それに、さやうに心を盡くすこと、不用なるぞ。」と上意（上の御仰せ）ありけり。老僧、「御身は誰人なれば、かく心なき事をいひ給ふぞ。よく思ひてみたまへ。今この木どもつぎておきなば、後住の代に至りて、いづれも大きくなりぬべし。然らば林も茂り、寺も黑みなんと、吾は寺の爲をおもひ

てすることなり。あながちに吾一代に限るべきことかは。」といひしを、聞かれて、老僧が申すこそ實にも理なれ。」と、御感ありけり。

その程に御供の人々おひ〳〵來りつゝ、御紋の物どもも多く集りしかば、老僧それに心得て、大きに惧れて、奥へにげ入りしを、御召出ありて、物など賜ひけりとぞ。

二三　伊能忠敬の晩學その一

幸田露伴

忠敬、十八歳にして出でて伊能氏を嗣ぎ、自ら抑へて敢へて平凡の人となり、一意專心、たゞ伊能家の衰へたるを興し、己が任務を最も圓滿に最も美はしく果さんことを期したり。

才氣ある者の常として、己が欲せざることには、一擧手一投足の勞をも惜しみ、單に己が欲することにのみ身を委ね、心を竭さんとするは、免れがたき習なり。たとひ己が欲せざるこ

伊能忠敬

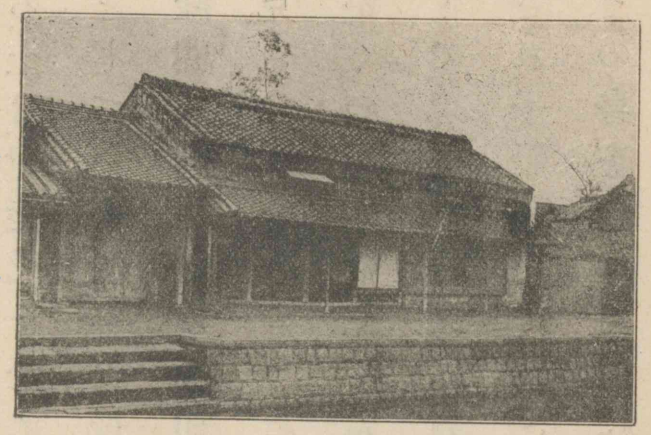
となりとも、己が爲さざるべからざることなる限、甘んじてわが情を屈し、わが氣を抑へて、わが爲すべき事をなすものは、その人啻に才氣あるのみならず、また實に德量ある人なりといふべし。

世に才氣ある人は多し。才氣ありて德量ある人は少し。德無くして才のみ優れたるは、譬へば鋭き刀の肉薄きが如し。よく物をば截るべし。折るゝ虞は免るべからず。されば才子の奇才を抱きながら成功を見ずして、中途に廢する例は、屢見るところなり。忠敬が算數、曆術の學を嗜み、且これを善くすべき資を抱きな

がら、枉げて自ら市井の凡人に伍し、「伊能氏を嗣ぎたる上は、伊能氏を榮えしむべし。」といふを唯一の希望として、三十餘年の長き歳月の間、孜々として家運の隆興を圖りたるが如きは、實にその德量の大なるを見るべきなり。

かくの如くにして、忠敬は五十歳に至り、伊能家中興され、子景敬家を嗣ぎたれば、忠敬は始めて閑を得て、その身を己が自由に用ゐることを得るに至れり。忠敬のこの時は、常人にありては、もはや老境に入るべ

き時なり。されど心の壯なる人には、何歳の時も、前途多望なる青年の春なり。爲すある人には、如何なる場合も、わが力を試るべき處たり。忠敬は常人が世の務を辭して、花月の遊を事とすべき時に當つて、始めて學に就き、而して後漸く世に出でんとせり。後の爲すあらんと欲せば、青



佐原町伊能家
（門に忠敬經營當時の舊態を存す）

これより可無せんとするもの。

あらんと欲する者、苟も眞に爲すあらんと欲せば、青

佐原 今千葉縣香取郡佐原町。
深川 今東京市深川區。

年空しく過ぎて、身の將に老いんとするを、歎ずることなかれ。

二四　伊能忠敬の晩學 その二

さて忠敬は鄕里佐原を出でて、飄然として江戸に至り、寓を深川に定めて一學生となれり。年こそ老いたれ、實に一學生となれるなり。尋常一樣に笈を負ひて鄕關を出で、上國に遊びて、師を尋ね學に就く書生と異なるところは、たゞその若きと老いたるとの差のみ。かくて忠敬はその好める學に身を委ねたるが、已

が滿足し信仰すべき師を得ることは、容易ならざりき。

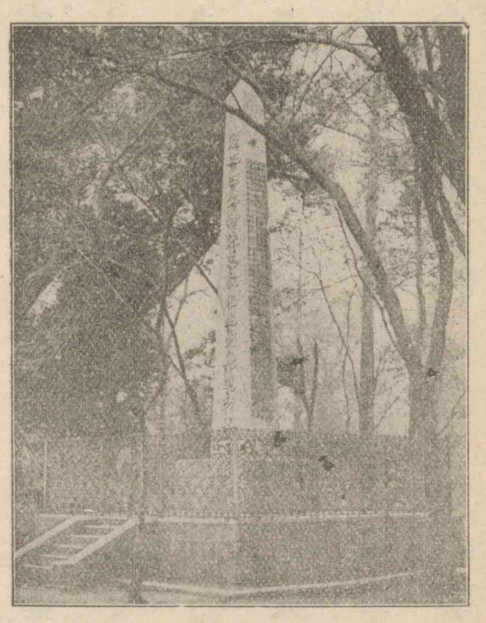
幸にも當時幕府に暦法改正の擧ありて、算數、暦象に精しき高橋東岡、これがために特に大阪より召されたれば、忠敬直ちに訪ひて、東岡と師弟の契を結べり。時に忠敬は五十歳にして、東岡は三十二歳なり。普通の人情にては、己れより年若き人に會ひては、たとひ己が學業などその人に及ばずとも、なほ強ひて自ら高ぶり、敢へて頭を下げざるが習なれども、德量ある忠敬は、眞に敬ふべき學識ある人に對して拜伏する

を、いかでか厭ふべき。東岡もまた意に介せざりしかど、同門下の者らは、師たる東岡の若くして、弟子たる忠敬の老いたるをば、屢笑柄となしたりといふ。

晩學の難きは、實にいづれの世にありても、かゝる事情の存するによるなり。是を以て非凡の士にあらざるよりは、自ら恥ぢて、敢へて師に就き學を修むるの勇を缺き、終に空しく志を抱きて、墓穴に入るに至るなり。本來、老いて學ぶは、まことにその志の淺からざるを顯すのみ。また何の不可なるところかあらん。況やまた何の恥づべきところかあらん。思ふに衆人の

喋々を聞くこと、忠敬にありては、たゞ蚊蝱蟋蟀の鳴くを聞くが如くなりしなるべきのみ。

忠敬と他の同門の徒との優劣勝敗は、比較するまでもなく明なり。忠敬の學術は、長堤の決潰して、水の迸流するが如き勢を以て歩を進め、早くも同門下には肩を比すべきものなきに至りて、遂に東岡の學の蘊奥を極めたり。かくて忠敬は幕府に上書して、各地の實測をなさんことを請ひ、命を得て、まづ今の北海道の實測に從事せり。これ忠敬がその學術を世に用ゐたる始にして、時に年五十五なりき。五十五歳といへば、人は漸く退老を欲する年齢なり。されど忠敬は氣力旺盛、壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて、喜色面に溢れ、



伊能忠敬先生測地遺功表
（東京市芝公園園山）

卽日にも出發せんとする勢ありきといふ。

二五　堅志力行

安田善次郎

私の六十年來の經驗によつても、確乎不動の決心と

百折不撓の堅志とを以て事に當る人の精神ほど、確實に信用の出來るものはない。かういふ人が一度斷然と決心して、「はい、宜しい。承知しました。」といへば、この一言は、どんな證文よりも、どんな擔保よりも、遙に安心が出來る。諺に「一諾千金」といつてあるのは、眞にこの種の人の決心に始めて見ることが出來るのである。

一諾千金　得ニ黃金百斤一不レ如ニ季布一諾一（楚諺）

さういふ人が一度かうと決心して、或事業に著手した以上は、たとひどんな難事業であるにせよ、初に決心したその時に、もうその事業の大半は遂行したのも同じである。そこで、この人が一度事に當れば、たとひその事業の中途に、どんな失敗を招いても、どんな打擊を受けても、これがために責任を避けるやうなことを斷じてしないのは、言ふまでもなく、却つて躓いた石を取つて、直ちにそれを踏石として進み、終に目的を遂げなければ止まないのである。故にその事業に就いて、周圍よりどんな非難妨害が來ても、またその進路にどんな困難障碍が起つても、少しも心に掛けず、たゞその目的に向かつて一直線に猛進するばかりである。途中の困難に對して、果して凌げるか、

どうかと、狐疑逡巡などする遑もなく、たゞどうして進まうかの一念で突貫するのである。

故にこの種の人物が成さうと決心したものを止めようとするのは、言はば太陽の昇るのを止め、潮の滿ちるのを止めようとするやうなもので、全く無用の事であると、誰も承知して居るから、この人の進路を妨げるやうの位置に立つて居るものは、自ら避けて道を開かずには居られない。非凡な堅志力行の人の進路は、すべてかうであるから、その決心に對して成功の如何を危惧する必要は、全くないのである。

要するに、困難とか苦痛とか悲運とかいふやうなものは、畢竟薄志弱行者の愚痴に過ぎないのであつて、志望堅固の力行者の進路には、困難もなければ、悲運もない。却つて悲運を轉じて幸運とし、困難を變じて安樂とするのが、意志の力の絶妙な働と謂へるのである。世間で數多の人々が大希望、大抱負を抱いて、成功の幸運を目的に出發しながら、空しく失敗の悲運に一生を終へるのは、何故であるか。學問がなかつたためであるか、技能を缺いて居たためであるか、資金が缺乏したためであるか。皆違ふ。たとひそれらが一

分の原因であつたにせよ、その根本をたづねると、堅忍不撓の意志の力を缺いて居たことに歸しないのはないのである。

二六　地震の前兆

細川潤次郎

嘉永、安政の頃、麻布あたりに金剛大夫といふ能役者あり。鼓打つわざは更にも言はず、よろづの樂器に通じて、調子を聞き分くること、いと妙なりき。ある日、鼓の調子常にかはりければ、不思議の事なりとて、餘の樂器を鳴らし、また餘人にもせさせて之を聞くに、初

嘉永、安政　共に約六十年前の年號。

麻布　今の東京市麻布區。

の如くなりければ、處によりて變ることもやあらんと思ひ、家の外にて試たれど、猶同じ調子にきこゆるにぞ、是必ず非常の天變あるべき前兆なるべしと思ひ、家内の者に命じ、庭の片隅にあらゆる器具を運ばせ置き、「指圖次第に彼處に集るべし。」といふ。之を見聞する人々、金剛大夫は狂氣せしにやあらんなど、つぶやきけるが、三日を出でぬ内に大地ゆるぎ出し、家屋崩れ、老幼男女うたれて死するもの幾萬人といふ數を知らず。是ぞ安政二年十月二日の江戸大地震なりける。此の時、金剛大夫は家に死傷者なく、器具も損ぜ

ずして、あたりの人に羨まれたりといふ。音律の空氣に關係あるは言ふまでもなし。地震も空氣に關係あるべければ、樂器の調子に由りて大地震を前知したるは、怪しむべきことにはあらじかし。

昔豐太閤の時、森本檢校といふ者、音律に妙なりしが、律の調子の常にかはりたるを疑ひ、伏見より京都に上りたるに、其の調子猶善からぬ故、愛宕に往きて試けれども、猶かはりなければ、是吾が身の上の事ならんと思ひ、深く悲しみ居たりけるが、其の夜大地ゆるぎいだし、愛宕の山崩れて、家を倒し、檢校死したりき。

伏見　今の京都府綴喜郡伏見町。京都市を南へ距る一里餘。

愛宕　京都の西北方にあり。

是伏見大地震の日の事の由なり。

金剛大夫と森本檢校と、音律に由りて地震を前知したることは同じけれども、吉凶禍福は同じからず。

二七　震害地より

御見舞の電報ありがたう。いづれ、もつと落ち付いてから、委しい手紙をあげる事にして、今日は取敢へず大體の事を御知らせします。

地震のあつた十三日は非常によく晴れた、少し蒸し暑い日でした。午後三時頃、私達は學校から

休暇で歸つて來て居る弟を中心にして、お八つを食べて居ました。皆で冗談を言つて、賑やかに笑つて居ると、不意にどしんと音がして、からだがぐら〳〵としました。地震と誰言ふとなく言つて、一同が立たうとすると、又ぐら〳〵と家が搖れたやうで、弟がいきなりそこに倒れてしまひました。すると、近所から突然ひどい悲鳴が聞えて來たので、一同が心底から、大變な事の起つた事を感じました。

咄嗟の間に私は末の妹を引かゝへて、家を飛び

出しますと、母も弟も父も續いて出て來ました。私達は走つて裏の竹藪に逃げ込んだのです。すると、何處かでめり〳〵と大きい木の折れる音がしました。子供達は泣き出すし、一同の心にも、以前の大地震の時の事が思ひ出されて、誰も一言も口をきくものがありませんでした。

あとで聞くと、近所の農家で、十五六軒は半ば壞れたのがあるといふ事ですが、私の家では、屋根の瓦が少し落ちた位ですみました。今では多少笑話も出來ますが、その時には、全くどうなる事

かと思ひました。

右のやうですから、まづ〳〵御安心下さいませ。

ふかし今でも何となく不安心に思はれるところもあります。只今當地ではその事の噂ばかりです。

東京の皆様によろしく。別に手紙を書きませぬから、あなたから御傳へを願ひます。草々。

（一日一信）

二八　勇士の行くて

幸田露伴

命をふくみて勇士出で、
馬をうたする朝まだき、
胡天三月、春寒くして、
風に骨あり、雪に聲あり。

小手をかざして見やる彼方に、
白雲こむる空はを暗く、
鐙踏みしめ、だくを追ふ路、
鐵蹄すべる氷危し。

さもあらばあれ、さもあらばあれ、
人に意氣あり、馬に騂あり。
風たゞみだす、馬のたてがみ、
雪たゞくるふ、人の眼の前。
命をふくみて、馬をうたする
勇士の行くて、風雪もなし。

午後五時
明治三十七年七月二十七日のことなり。

二九　肉彈

午後五時は來た。我が全砲兵は一齊に砲火を開き、歩兵も亦全力を擧げて射擊を始めた。天地は忽ち硝煙

の雲霧に鎖された。飛彈、爆鳴は山谷を劈かうとするほどであつた。我が歩兵は射ては進み、止つては擊ち、奮進又躍進。小隊長殿と微に響くのは最後の感謝で、あつと叫ぶのは、玉の緒の絶える聲。只進め、進んで死ねと、將校は軍刀を揮るつて、戰線を彼方に走り此方に驅けて、士氣を鼓舞してゐた。

豫備隊であつた二個小隊も、工兵も、亦第一線に增遣された。遂に我が第一大隊は、敵前實に二十米突の近くまで肉薄したが、前に立ち塞がつてあるのは、屏風のやうな岩山で、殆ど一つの足場もないから、如何に

あせつても、攀ぢ登ることが出來ず、側面からは敵彈をばら〳〵浴びせかけられる。正面に向かつた第二中隊は、只々敵の機關砲の標的となるばかりで、見る見るばた〳〵と仆れる。而して又我が軍の榴霰彈は、花火のやうに空中に破裂しただけで、敵の防禦工事に對しては、殆ど何一つ效力を奏しなかつたやうである。「榴霰彈では役に立たぬ。早く榴彈を發射してくれ。」と、砲兵隊に頻に傳令使を派遣したが、一人として歸つて來ず、皆途中で仆れた。工兵の小隊長に、爆藥を送つて來いと命じたが、それも間に合はなかつた。

七時も過ぎ、八時、九時ともなつたが、形勢は依然と發展せぬ。夜は已に更けた。物凄い下弦の月は、淡く戰場を照らして、陣地の半面を朧に露してゐた。をりしも、遙に左翼の方に當つて、ほがらかな「君が代」の喇叭が聞えた。その聲は月影の細い空を傳ひ、餘韻が微に長く延いて、予等の腦裏に一しほ深く沁み渡り、恰も陛下御親ら「前へ」と號令なさるやうに感じられて、將卒は皆自然に身をひきしめ、勇氣更に百倍し、忽ち奮躍して、彈雨を犯し、岩石を攀ぢて、猛進し、大喊聲を放ちながら、敵壘に突入した。眞黑に固まつた一團の先頭

松村少佐
名は安雄。陸軍歩兵少佐。

に立つた松村少佐は、眼を瞋らして、叱りつけるやうに、

「突き込め、突き込め。」

「君が代」の喇叭はなほ盛に起る。各隊は續いて、萬歳、萬歳を連呼して、聲援を與へた。山上には劍尖相擊つて火花を散らし、接戰格鬪、

「これが大和男兒の最後の肉彈だぞ。傲慢無禮のこの仇、今知れ。」

と、打ち込む太刀筋に、鮮血の河を流し、伏屍の山を築いた。慘は慘だが、艱難苦楚のはてに、やつと敵を擊ち

大白山
旅順の東約三里にあり。

破つた我等の愉快は、如何ばかりであつたらう。海嘯のやうな一團のあとから又一團と、我は續々兵力を增加するので、敵は遂に猛烈な攻擊に耐へられず、翌日午前八時、東天に紅を染め出した頃、我が軍は確實に大白山一帶の高地を占領した。軍旗はひら〳〵と陣頭に飜り、萬歳の聲は潮のやうに湧いた。（肉彈による）

三〇　膽大心小

大町桂月

小事に拘泥すると、小事を忽せにせざるとは、一寸似て大いに非也。而して凡夫と偉人と岐るゝ所也。大事

を成さんとする者は、全局を大觀すべし。小事にこせこせすべからず。されど、千丈の堤も蟻の穴より壞る。小事を放棄しては、大事終に成らざるべし。好運を得んと思ふ者は、膽大心小の語を玩味せよ。膽小の者は小事に拘泥し、心大の者は小事を忽せにす。孰れも好運を得べくもあらざる也。

二宮尊德曰く、「大事を成さんと欲せば、小事を怠らず勤むべし。小積りて、大となればなり。小人の常、大を欲して、小を怠り、難き事を憂へて、易き事を勤めず。終に能く成すことなし。大は小の積んで成ることを知らざるが故なり。」と。大田錦城は曰く、「一粒の米、一寸の紙も大切にすべし。粒米寸紙を粗末にする人は、必ず天罰を蒙り、身を亡し、家を滅す。粒米寸紙を大切にするは、吝嗇にあらず、小量にあらず、天物を暴殄せざるの大道なり。古より大功業を建つる人は、粗豪にして浮氣粗心なる人にはあらず。」と。

大田錦城　名は元貞、江戸の儒者。約百年前の人。

或人米國無雙の富豪アスターに向かつて、成功の祕訣を問ひ、且曰く、「子の成功は僥倖なりや否や。」と。アスター曰く、「否、決して僥倖にあらず。何となれば予よりも更に一層僥倖を得べき機會の多かりし人、數多あ

アスター　獨逸出生の米國商人。千八百四十八年四千萬圓の資産を遺して紐育にて死せり。

りしかど、皆富まざりき。」と。問うて曰く、「さらば勉強其の原因となりしか。」と。アスター曰く、「否、勉強も成功の原因なるが、百折撓まざるの點に於て、予に讓らざる人、數多ありしかど、皆依然として貧なり。」と。問うて曰く、「さらば氣力に富みたること其の原因となりしか。」と。アスター曰く、「氣力は確に成功の原因の一なり。されど氣力のみを以て原因となすこと能はず。予は氣力に富みたる人の失敗したるを多く知れり。」と。終りに問うて曰く、「さらば成功の祕訣は如何。」と。アスター曰く、「予が富を致したる最大原因は、小事を忽せにせざるにあり。」と。なほ語をつぎて曰く、「實業家動もすれば、唯大體の見込を立つるのみを以て足れりとし、小事は他人に任するも差支なしとなすものあり。これ不可也。番頭、手代等の不注意より事を誤りて、長く中層以下に蟄伏せざるを得ざる者多し。」と。

駿河町　今東京市日本橋區駿河町。

三一　越後屋の創業

熊田葦城

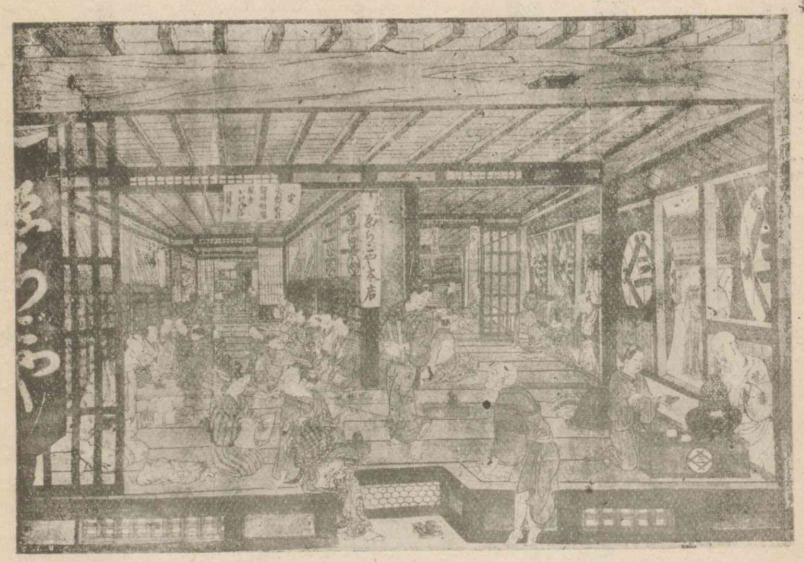
江戸駿河町越後屋の事業、大いに勃興して、遂に本町の吳服商を壓倒するに至れるもの、全く其の店主三井八郎兵衛高利の機敏と奮勵とに基づく。

元和八年 今より約三百年前。

三井三郎左衛門俊貞 八郎兵衛の兄なる則兵衛高俊の長子。

承應、明暦 共に今より二百六十餘年前の年號。

八郎兵衛は元和八年の生まれにして、幼少の時より、宗家たる三井三郎左衛門俊貞に仕へて、商業を見習ひ、三郎左衛門の死去するに及び、始めて江戸に出でて呉服商を營む。之を三十年前後の時とすれば、正しく承應、明暦の頃なるべし。當時、呉服商は大抵懸賣にして、即時に代金を拂ふを要せざれども、其の代り正價に二割、三割の掛値を加ふ。故に一兩の商品は一兩一分前後に賣り鬻ぐを例とす。八郎兵衛はこの習慣を打破して、現金安賣の制を始め、商品には悉く正札を附して、一文も掛値を加へざると共に、代金は即時



越後屋店（元祿時代）

に之を申し受く。其の商店は間口六間、奥行十間の大店にして、そこに四十餘人の手代、ずらりと居並び、金襴は金襴、緞子は緞子と、一々部類を分ちて、一人の手代、一種の商品を專門に取扱ふ。されば手拭一筋、足袋一足と雖も、自由に購ひ得る

のみならず、至急を要する衣類は、顧客を待たせ置き、其の間に仕立てて渡す。其の價格既に他店よりも安く、其の便利亦他店の比にあらず。此の事忽ち大評判となりて、何れも越後屋へ、越後屋へと足を運ぶもの多く、其の聲價早くも諸商店の上に卓出して、賣上高一日千兩と云へる記錄を作るに至りしなり。

越後屋は、江戸の商業大いに繁昌すると共に、京都、大阪を始め、東西の各地に支店を設く。此の本支店の間、常に金員送達の便あるを利用し、幕府に請うて六十日爲替の用達を始む。例へば大阪の城代、江戸に送るべき金一萬兩を大阪支店に託する時は、其の地方の吳服反物を仕入れて、江戸に送り、本店にては之を鬻ぎて、六十日以内にかの一萬兩を幕府に納む。幕府にては、現金を送附するの手數と費用と危險との煩累なく、越後屋にては、之を商業

三越吳服店

に利用するの便宜ありて、誠に一擧兩得の法たり。是より幕府も、代官も、はた諸侯も之を利用するもの益〻多く、越後屋の是に由りて獲たる利益、亦頗る大なるものあり。

三井家今日の鉅富を致せる基礎、蓋し此の一事大いに與つて力あり。越後屋は今の三越の前身なり。其の商業に斬新奇拔の法を用ゐて、歩々是新なるを期するもの、正しく其の創立以來の精神なるを知るべし。世の商業の發展を期せんとするもの、是等の處より悟入（さとらねばならん）するを要す。

三二　眞の成功

成功とは、必ずしも金滿家になつて、大きな家に棲み、美衣、美食することばかりをいふのではない。否、眞の成功とは、金の有るなしに關らず、自分の選んだ業務について、日本第一等或は世界第一等の人となるのをいふのである。銀行、會社の事務員や、官吏、公吏でもまた軍人、僧侶でも構はぬ。ガスランプを點火する點火夫でもよい。汽罐の火夫でもよい。活版屋の車廻しでも、大道の掃除夫でも、煙突掃除人でもよい。何の職

業にしても、かけがへの無い人物になりさへすれば、立派な成功である。大會社の社長にも大成功者があり、電車の車掌、運轉手にも大成功者がある。何でもよいから、一つの職業について多年の經驗を積み、これに深く精しく通じて、その道にかけては神の如しといはれる人は、皆それ〴〵大成功者である。

かけがへのない人物は、社會に重く用ゐられるから、隨つて生計は安樂になる。しかし、衣食の豐富を得たことが、成功ではなく、かけがへのない人物となつたといふことが、成功である。近い例を言へば、こゝに或

精巧な機械を操縱する一職工があつて、多年の熟練で、その仕事については、實に獨特の腕を持つてゐるとする。若しこの人が一日でも缺勤するならば、他人で補充することが出來ないから、その工場では大困りに困ることとなる。このやうに、どうしてもこの人でなければならぬといふまでに、その道に精通熟達して居れば、その生活は一生決して心配がない。萬一その工場が倒れることがあつても、何處の同業者も爭つて雇つてくれる。これこそ眞の成功ではあるまいか。（從業の道による）

三三　生きるために食へ

加藤弘之

「生きるために食へ、食ふために生きるな。」とは、西洋の古諺であるが、凡そ人間とある者は禽獸と異にして、萬物の靈長ともいはれる者であるから、禽獸と均しく、徒らに、食ふがために生存してよいものでない。必ず生存して以て事を爲すがために食はねばならぬと、教誡したのである。

然るに凡そ人間の多數は、殆ど唯食ふがために生存するやうな有樣であつて、生存して事を爲すがため

に食ふ者は、僅々少數に過ぎない有樣であるのは、實に歎かはしいことではないか。凡そ不健康の者か、又は瘋癲、白痴の類となると、食ふがために生存するのも、已むを得ないことであるが、苟くもかやうの狀況の存しない者であつて、猶懶惰放逸、何の爲すこともなくて、一生を送るやうなのは、實に解せられぬ。凡そ此の人間に生を稟けて、多少健全な心身を具有する以上は、其の心身の堪へる限り、社會の事業を執つて、已れを益し、併せて社會を益することに努めねばならぬ。學問、技藝、宗教、教育、農工商業、其の他、萬般の業務

は、皆己れを益し、併せて直接間接に社會を益するものであるから、各人其の性の適する所に隨ひ、其の好む所を擇んで、之に從事するのは、卽ち人間の責務を盡くすものといつてよろしい。

赤貧で其の日の餬口にも追はれる者は、到底學習研磨の暇もないから、已むを得ず日傭、小使等の賤役を執るもよい。而かも是亦それ相應に社會の用をなすといへばいはれる。然るにかやうの狀況に陷る者でなくて、稍生計の出來る者、及び資產の甚だ富んでゐる者が、何の志望をも抱かず、學習研磨にも從事せず、

唯碌々と今日を送るやうなのは、實に全く食ふために生きるものと評するの外はない。而して人間の多數がかやうの狀況で生存するとは、實に驚かぬわけにはゆかぬ。學問、技藝、宗教、教育などのやうなのは、固より資產を作るの道でないから、纔に一家の生計を立てれば、それで宜しい。唯孜々汲々、一意專心、其の事務に勵精せねばならぬのである。かやうにすれば、人は各己れを益し、併せて社會を益するに足ることであるから、全く生きるために食ふものであつて、人間の責務を盡くしたものといふことが出來るが、之に

反して、何事をもなさず、唯懶惰放逸に一生を送るやうなのは、全く食ふために生きるものであつて、禽獸と何の擇ぶ所もない譯である。

凡そ國家の進歩、開明は、卽ち個人勵精の結果に外ならぬ。今日の吾人は、祖先の勵精に由つて成つた、今日の國家を繼續して居る者ではないか。果して然らば、今日の吾人は、更に此の國家の進歩、開明に勵精して、以て之を更に吾人の子孫に傳へなければならぬではあるまいか。子々孫々、亦能くこの通りであれば、國家の進運は駸々として止る所が知られぬであらう。

我が日本人種は、決して歐人種の下位に屈する劣等種でない。然るに將來全然歐人種と比肩對峙して、能く之と競爭するか、將遂に能くかやうになることが出來ないかは、唯個人の勵精如何に由るのみである。豈悠々緩々、食ふために生きるの時でないではないか。

ゆったりゆるゆる

實業教育

國語讀本 卷二 終

大正九年一月廿九日印刷
大正九年二月二日發行

實業教育 國語讀本
各卷定價金參拾五錢

大正十年度臨時定價金七十七錢

著作者 新村出
東京市小石川區小日向水道町八十四番地

發行兼印刷者 株式會社 東京開成館
代表者 渡邊良助
東京市小石川區小日向水道町八十四番地

發行所 株式會社 東京開成館
振替貯金口座東京第五參貳貳番

西部販賣所 大阪市東區北久寶寺町心齋橋通角 三木佐助

東部販賣所 東京市日本橋區數寄屋町九番地 林平次郎

著作權所有
檢印 著者
不許漢譯

兵林館印刷所印刷